
真剣で女神に恋しなさい！

黒★猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で女神に恋しなさい！

【Nコード】

N3567N

【作者名】

黒★猫

【あらすじ】

女神の身体を持つセリカと使徒のエクリアが時空の亀裂に吸い込まれてしまう。

気づくとそこは川神市という見知らぬ場所だった。

そしてセリカは武神 川神百代と出会い・・・

戦女神と真剣で私に恋しなさいのクロスオーバーです。

百代とセリカのバトル&学園物にしようかな〜と思っています。

プロローグ（前書き）

初めての投稿なので、不自然な所はスルーして頂けると助かります。
では駄文ですがお楽しみ下さい。気分を害された方は申し訳ありません。

プロローグ

多数の魔物が自分たちの周りを囲んでいた。魔物たちは獲物を求めていたらしく自分たちを見つけると構わず襲いかかってきた。これだけの数でなら楽に終わるだろうと相手も余裕そうに構えていた。しかし魔物の予測は大きく外れた。多くいた魔物は既に三体しかいなかった。一体が跳躍し渾身の一撃を自分に繰り出そうとするが、紙一重でかわし腰に携えている剣の一閃により斜めに崩れ落ちた。残りの魔物は悪あがきに挟殺を仕掛けようとしたが自分の付き人の魔法攻撃を食らい灰と化していた・・・

「一段落しましたね、セリカ様」

付き人は自分に話かけた。

俺の名前はセリカ・シルフィール

女神アストライアの身体を奪い世界からは神殺しと呼ばれている。故に光勢力からは邪神、闇勢力からは力の糧として狙われている。今は表舞台から身を隠し世界を放浪している。

「・・・ああ、エクリアは大丈夫か？」

俺はエクリアの安否を確かめた。彼女の名前はエクリア・フェミリス 元カルツシャ王国の女王であり別名「姫将軍」と呼ばれていた。姫神フェミリスの末裔であり大戦で力を解放するために妹を手に掛けるが、神の力を制御出来ず暴走し戦いに敗れた。そして神殺しである俺に断罪を求めたが、俺は裁かず使徒として一緒に旅をしている。

「どこに行っても敵は減りませんね」

エクリアはため息混じりに俺に言った。

「俺が持つ女神の力に引き寄せられているんだろう」

俺はそう答えた。すると

（先程の魔物たちは運がなかったの）とセリカの腰に携えた剣が震えた。

「ハイシエラ、起きてたのか」

（最初から起きているわ、たわけ！）

ハイシエラはセリカに怒鳴った。

剣に宿る声の主の名前は魔神ハイシエラ

女神の身体を持つセリカを狙っていた強敵の一人だ。

セリカはハイシエラと女神の身体を賭けた一騎打ちで勝利し、ハイシエラを剣に封じたと本人はそうのように話している。

（お主は忘れやすいからのう、我はもうあきらめたわ）

ハイシエラは何故か呆れていた

俺もエクリアと同じく神の力を制御できないせいで過去の記憶がない。何故俺はアストライアから身体を奪ったのかも思い出せない。しかし約束は覚えていた。たった一つの約束・・・

「生きて」という約束を

第1話 時空を越えて

セリカたち三人は険しい山脈を歩いていた。片方は絶壁、もう片方は崖になっており川が唸りながら流れていた。

「険しいですね」

エクリアは額の汗を拭きながら告げた。

「・・・辛いかな？」

俺は時々振り返り何度か言った。するとハイシエラは

（これセリカ、そんな素っ気なく答えるでない。もう少し優しく言ったらどうだの）

ハイシエラはやれやれといった感じで俺に心話で話してきた。

「私は大丈夫ですよ」とエクリアは心話に入ってきた。

しかししばらくすると周りの様子に変化が起き始めてきた。鳥の鳴き声は無くなり空は暗くなり、空気は淀んできた。

（セリカ、気をつけよ！何かが起きているかも知れん）

ハイシエラはセリカたちに警告してきた。

俺は鞘から魔神剣を抜き構えた。エクリアは俺の背中を合わせ後方

の警戒を強めた。

警戒して数分後、そよ風が吹いた瞬間

バキバキバキッ!!

セリカの前方の空間がいきなり大きな音をだして割れた。
そして割れた空間は周りの物を吸い込みはじめた。

(いかん! 吸い込まれるぞ)

「くっ!!」

俺は剣を地面に深く突き刺し堪えようとした。
エクリアは自分にしっかりしがみついている。しかし割れた空間は
徐々に勢いを増してきた。

周りの岩は軽々しく空間に吸い込まれていく・・・

(このままでは・・・!!)

俺はこれ以上は危険だと思ったとき、自分たちが立つ地面が割れて
しまった。

「!!・・・しまった」

「きゃああああ!!」

俺とエクリアは割れた空間に吸い込まれた。
そして意識が・・・遠退いて・・・いく・・・

「・・・様。・・・セリカ様!..!」

俺はエクリアの声で意識を覚醒させた。どれだけの時間、意識を失っていただろう?

身体を起こしそんなことを考えていたが周りの異変により考えをやめた。

周りには町があり目の前には大きな門が建っていた。先程まで自分は山脈にいたはずなのになぜ?

「セリカ様、ここは一体?」

エクリアは不安げに俺に聞いてくる。それは俺が聞きたいが俺にもわからなかった。

(我とあろう者が、気を失うとは・・・)

ハイシエラが不服そうに声をあげた。俺はハイシエラに聞いたのだ。

「ハイシエラ、ここがどこか分かるか?」

(なんじゃ? 寝言など言っ・・・)

ハイシエラも言葉を失った。

(どこじゃここは！？我らは山脈にいたはず)

「そのはずだか山脈じゃない。俺の知らない町だ。ハイシェラはこの町に心当たりはあるか？」

(いや、知らぬ土地じゃ。そもそも我らが住んでいた所と雰囲気が違う。)

セリカとハイシェラが話し合っていると、前方の門がいきなり開いた・・・

～Side鉄心～

いきなり巨大な気を感じ、目を醒ました。場所は川神院の前・・・突然現れたので鉄心は驚いた。これほどの気をわしが感知出来ないなど・・・

歳をとりすぎたかのう？

百代なら気づくと思うが、今日は百代が居なくてよかったわい。

そんな事を考えながら門まで行き開けた先には二人の女子がいた。そして二人の視線がこちらに向く。

「おぬしら、儂の家になにか用かの？」

鉄心は笑顔で二人に話しかけた。

（Sideセリカ）

目の前の門が開き1人の老人が現れた。眉毛と髭が長く相当な歳だと思わせる。

しかし俺はそうとは思わなかった。目の前の老人は圧倒的な威圧感を秘めていると本能で感じた。

（この老人・・・魔神級を軽く超えているだの）

ハイシエラも俺と同じ感想を言った。それほどの相手かと思ったが老人は笑顔になり話しかけてきた。

「おぬしら、儂の家になにか用かの？」

老人からは敵意を感じないと判断したのかエクリアは老人に話しかけた。

「すみません、お聞きしたいのですがここはどこでしょうか？」

エクリアは俺たちが今最も知りたいことを聞いた。

「ここは川神市じゃよ」

老人は質問に答えた。

「川神市？知っているかエクリア？」

「いえ、存じていません」

（我も知らんだ）

どうやら全員が知らないらしい。すると老人が

「まあ立ち話もなんじゃ、中に入りなさい」

と俺に言ってきた。

一瞬迷ったがハイシエラはあの老人からは敵意を感じないと言ったので俺たちは門の中に入った。

第1話 時空を越えて（後書き）

第1話はこんな感じにしました。次回は百代と対面するかしないか迷っています（汗）

読んでくれた人は感想をお願いします。

あとこんな感じにしてなどと要望も書いてみてください。

第2話 川神院

俺たちは老人に招かれ建物に入った。俺がいた世界の建造物に似てないが歴史を感じさせる建物だと思った。そして居間に着いて老人は、

「まあ、座んなさい」

とにこやかに座りながら言った。

俺たちも同じように腰をおろした。

「自己紹介がまだじゃったな。俺の名は川神鉄心、ここ日本の武術の総本山である川神院の総師をやっておる」

「私はエクリア・フェミリスと申します。」

「・・・セリカ・シルフィル」

3人は軽く身分を紹介した。

鉄心は一言セリカたちに質問した。

「おぬしたち女子2人はどこの者じゃ？日本人には見えんが・・・」

「私たちはラウルバーシュ大陸のアヴァタール地方にある王都プレイアの者ですが」

エクリアは鉄心の質問に答えたが鉄心は告げた。

「王都プレイアなどの都市は聞いたことがないぞ」

その言葉にセリカたちは驚愕した。あのプレイヤーを知らない？ なのかの間違いだと思った。
しかしハイシエラが

（我は日本などという国は知らん。もしかすると我らはあの吸い込まれた空間で別の世界に飛ばされたかもしれん。ただし可能性の話だが・・・）
と言葉を濁しながら答えた。

「セリカ様、ここは一旦私たちの出来事をお話した方が良いと思います。」

エクリアは真剣な表情で俺に言った。俺は首を縦に振った。

「鉄心さんよろしいですか？」

「ん？ なんじゃ」

鉄心がこちらに顔を向け耳を傾けた。エクリアは俺たちがこの世界の住人ではないこと、突然現れた空間に吸い込まれたことなどを話した。

事情を話し終わると鉄心は、

「ほっほそれは興味深いのう。おぬしらの事情は分かった。そうなのとおぬしらが身を休ませる場所が無いの。しばらく儂の家いるがよい。ここで会ったのもなにかの縁か運命じゃ」

鉄心はセリカたちに川神院に滞在して良いと言った。

エクリアは鉄心にお礼を言っているが俺は先程の言葉が引っ掛かった。

「運命・・・か」

昔に誰かにそんなことを言われたような気がした。

俺は感情が欠落しているが、これはどのような気持ちだったか？

（おそらく「懐かしさ」ではないか？）

ハイシェラが俺の考えを言い当てた。

懐かしいか・・・

ハイシェラと心話をしていると鉄心は

「2人とも気分直しに風呂に入ってきてはどうじゃ。川神院の風呂は露天風呂じゃぞ」

と俺たちを心境を悟ったのか風呂を勧めた。

「セリカ様、どうしますか？」エクリアは俺にどうするか答えを待っていた。

しかしなぜかエクリアの目はキラキラと輝いていた。

（嬢ちゃんはその露天風呂に入りたいみたいようだの）

俺は自分に構わず行ってきていいと言うと一礼して露天風呂に向かって行った。

風呂に向かう後ろ姿は嬉しそうに見えたのは気のせいだろうか？

「おぬしは行かんのか？彼女と一緒に露天風呂に入ればよろう。女2人の旅は辛かろう」

残った俺に鉄心は尋ねた。

その質問に俺は

「別にたいしたことはない。もう慣れたしエクリアはお前が思っているほど弱くはない。」

「そうか、悪かったの」

鉄心はセリカに対して謝った。

そしてセリカはその場を立ち去る前に鉄心に一言だけ言った。

「言っておくが俺は女じゃなく男だ」

そう言い捨て廊下を歩いた。

その場にいた鉄心は今の言葉で石像のように固まっていた。

その姿を剣の中で見ていたハイシェラは声を殺して笑った。

川神院の中を散策していると前から1人の男が歩いてきた。

俺と同じ緑色の服装をしている。男と目が合い話しかけてきた。

「はじめまして、私の名前はルー・イーという。川神院で師範代をやっているヨ」

男は礼儀よく挨拶してきた。

「セリカ・シルフィルだ、しばらくこの厄介になるがよろしく頼む。」

俺はルーと言う男に答えた。

しかしルーはじろじろとセリカを観察するように見ていた。

そして、

「女の子にしてハ随分鍛えているようだけど、何か武术をしているのかナ？」

そう俺に質問してきた。

（また女か・・・）

俺はそう思い質問に答えた。

「剣術をしている。飛燕剣と言って人間が編み出した流派だ。あと俺は男だ」

「男の子だったのか！それは失礼したヨ」

ルーと少し話した後、俺は再び散策を続け気がついたときは、朝日が出ていた。

第2話 川神院（後書き）

次回は遂に百代との対面にしようかと思えます。

では次回お楽しみに！

第3話 武神と女神

セリカは1人庭にいた。
手には魔剣を持っている。

「ハッ！！」

剣筋は美しく、目の前にある空間を斬るような舞だった。

（こちらの世界でも能力に支障はないようだの）

剣に宿るハイシェラはセリカの剣筋を見て言った。

そうだな、とセリカは返事をした。しばらく剣筋を確かめっていると遠くから視線を感じた。

S i d e 百代

「ふう、今回の旅行は楽しかったな〜ワン子」

「うん、お姉様。美味しいものいっぱい食べて遊べたからこれから
の修業がさらに頑張れるわ。」

朝一の道路を百代と一子は旅行のことを話しながら川神院に向かっていた。

夏休み中にキャンプのこと風間翔一が商店街の福引きで見事一等賞

の旅行券を当てたのである。そして夏休み終盤に風間ファミリーで旅行に行っていたのであった。

百代は川神院の前に着くと動きを止めた。一子は動きを止めた百代の顔を覗き込んだ。

「どうしたのお姉様？」

「ワン子、ちょっと静かにしてくれ」

百代は一子にそう言い聞かせた。

（川神院に私が知らない気が3つある。1つは私ほどじゃないが、もう2つは私と同等か以上・・・）

百代は自分と同じくらいの力をもつ者の存在に歓喜していた。幾人もの挑戦者が百代に戦いを挑んだが圧倒的な力で一瞬に倒してしまいうので、百代は戦闘衝動が日に日に溜まっていた。

（2つの気の場所は・・・庭だな）

百代は急いで庭に向かった。

庭に着いた百代は遠くで剣を振るう人物を見た。

見た目は私と同じくらいの女子だがその剣筋は洗練されたものだった。

（気配は2つだった・・・もう一つはどこだ？）

百代は気配探知を試みるが先程の女子から感じた。

（気配を2つ持っているのか？まあそんなのは関係ない。どれほどの実力か確かめるか！！）百代は女子に向かって駆け出した。

S i d e セリカ

俺は視線の先を見た。

視線の先には黒髪長身の女が立っている。多分さっきみたいに観察されているんだろうと思い視線を外したが、

（セリカ後ろだ！！）

ハイシエラは大声で叫んだ。

後ろを素早く確認すると黒髪の女がこちらに突っ込んできた。女から轟音が出るほどの強烈な蹴りが放たれる。

俺は蹴りを紙一重でかわした。交差する際に目線が合う。

女の目は敵意と喜びが混じっているようだった。

俺は剣を女は拳を構えた。

（セリカこの女はかなり出来るぞ。油断せず全力で行かなければやられる。）

（分かっている。さっきの蹴りで確認した。紙一重とはいえあれが本気だとは思えない。）

2人の戦士が覚悟を決め激突する瞬間、

「これモモ！！！！お前帰って早々にやっとりゃ！！！！！！！！」

鉄心の怒気を含んだ声が川神市に響き渡った。

2人は動きを止め戦いは中断となった。

余談だが鉄心の強烈な一喝により川神市に住む住人が目を醒ましたのであった。

鉄心に説教を喰らった百代は不機嫌そうに居間に座っている。そしてセリカとエクリア、鉄心最後に一子も同じ座っていた。

「セリカよ先程はすまなかったのう。儂の孫娘が攻撃を仕掛けて」鉄心は百代の不始末を謝罪した。

「別に構わない。こういうのは慣れているからな」俺はそう返した。

「そうかのう、ではこれお前たち挨拶せんか！」

「川神百代だ」

「私は川神一子です」

「はじめまして、私はエクリア・フェミリスと言います」

「セリカ・シルフィルだ」

俺たちは軽く挨拶した。
すると一子は

「2人とも凄く美人よね。とってもモテそうだわ」
一子は素直に俺たちの見た目を言った。

「一子よ、エクリアはともかくセリカは男じゃぞ」と鉄心はさりげなく言い放った。

百代と一子は驚き俺を見た。

俺は今の言葉に頷いた。

「私と同じくらいなのに男だと・・・!!!」

何やら百代はぶつぶつ言っている。

その一方一子はバンバン質問してきた。

「ねえねえ、2人とも何か武術をやっているの？」一子は興味津々に言ってきた。

「俺は主に剣だ」

「私の場合は接続剣か鞭ですけれども」

セリカたちは自分たちが得意とする武器の名前を言った。

「接続剣？　じーちゃん分かる？」

「接続剣は鞭の一種じゃな。扱いが難しい武器じゃ」

鉄心は一子の質問に答えた。
すると百代は

「セリカ、私と勝負しろ！」

といきなり宣戦布告してきた。

「モモ!!! さっき言ったこともう忘れたか!!!」

「黙れジジイ、今回は正式に試合を申し込んだだろう」

百代と鉄心はまたしても言い争いを始めたのであった。

百代と一子を部屋に帰し鉄心は話しを進めた。

「ところでおぬしらは明後日からどうするつもりじゃ？」 「どうするつもりとは？」

エクリアは鉄心の質問に答えた。

「明後日からわしが経営する川神学園に行かなければならない。おぬしらはやる事が無ければわしの学園に編入生として入ってみるのはどうじゃ？」

と鉄心はとんでもないことを言い出した。

「私たちが学園にですか！？」

エクリアの言葉に鉄心はコクリと頷いた。

「強制はせんがせっかくこちらの世界に来たんじゃ、少しは未知の体験をしても良かろう」

鉄心は笑顔だったがその目は偉く真剣^{マシ}だった。

「セリカ様どう致しますか？」

「俺はやることが無いからな、別に行ってもいい。それと少し興味もある」

セリカたちは審議した結果、川神学園に編入することに決まった。

「それでは編入の件はこちらで処理するが・・・勉強は出来るんじゃないかな？」

鉄心は不安そうな顔で見してきた。エクリアは一通り勉学ができるようだがセリカは勉強をやっていたのかが不明であった・・・

第3話 武神と女神（後書き）

セリカ&エクリアが川神学園に編入することになりました。
なんだかセリカの性格も変わっているような・・・

そんなことで次回も気長にお待ちください。

ご意見ご感想をして頂ければ今後の参考にさせて頂けるのでよろしくお願いします。

第4話 新学期（前書き）

大和たちの日常は少し省略をしています。
気に障る方がいましたらすいません。
ではお楽しみ下さい。

第4話 新学期

9月1日、長い夏休みが終わり川神学園の新学期が始まった。

side 島津寮

大和はまどろみまがら意識を覚醒すると・・・目の前には京がいた。

「おはよう大和、そして結婚して！」

いきなり抱きつかれそうになるが、なんとか回避成功。

「おはよう京、でもお友達で」

「・・・フラれた」

「おいしい」

「おしくないから、ほら部屋から出てって」

大和は部屋から京を追い出した。

毎度ながら京のアプローチは疲れると大和は思った。

着替え終わって1階の居間に向かった。

「おう、大和ちゃんおはよう！」

麗子さんが挨拶をしてきた。

「おはようございます」

「今日も一段と麗しいですね」

「大和ちゃんはいいい子だね。朝飯におかずしといたげる！」

今日の社交辞令を終え居間の席についた。

席には先に来ていた源 忠勝、通称「ゲンさん」が朝食を食べていた。

「ゲンさんは新学期の朝も起きるの早いね」

「フン」

「あ、麗子さんの特製卵焼きがある。これ一番好き」

大和は卵焼き食べていると京は、

「じゃあ私の分もあげる（ハート）」

「真っ赤になった卵焼きはいらん」

大和はすかさず返却した。

大和と京が言い争っている居間のドアから3人が入ってきた。

キャップ、クリス、まゆっちだった。

キャップとクリスは眠そうな顔をしていた。

きつとまゆっちに起こされたんだろうと大和は推察した。

「今日から学校かよく俺はもっと休みたいぞ、大和！！」

キャップは大和に理不尽な文句を言っていたが大和は見事に無視していた。

全員が朝食をとり島津寮を出た時には岳人が塀に横たわっていた。

「遅ーよ何してたんだよ？」

「悪いガクト、キャップが学校行きたくないってグズツたからさ」

そう言い6人は学校に向かった。

川沿いを歩いていると週刊ファ○通を読みながらモロが合流してきた。

「おはようみんな」

「モロは今日も一段と影が薄いよね・・・幽霊かな？」

京は朝一から毒舌を放った。

「影が薄いとか言わないでよ！」

そんな会話をしながら歩いていると遠くで人だかりが出来ていた。

大和はまた姉さんの決闘だろうと思った。

案の定、人だかりの中心で竜巻が発生し1人の男性が空中高く舞い重力により落ちた。

大和たち一行は人だかりに到着するとそこにはうつ伏せに気絶しているさっきの男性とその近くに百代が立っていた。

「ようお前たち遅かったな」

百代は大和たちに合流した。

「姉さん、今日の相手は？」

「今日はアジアの秘境で修行したという修行僧だったが一撃であれだ」

百代は目で相手を見た。

「モモ先輩は手加減をしないからな。まるで血も涙も無い鬼だぐは」

余計な一言を言った岳人は百代の拳で吹っ飛ばされていた。そしてその後トレーニングが終わった一子も合流し川神学園に向かった。

風間ファミリーが多馬大橋（変態の橋）を渡っていると

「フハハハハハハハ！！！！！！」

後方からガラガラと人力車と雄たけびが聞こえてきた。人力車は大和たちの横で停止する。

「おはよう、庶民!!!」

「我こそは！！ 九・鬼・英・雄！」

「皆の英雄である！」

「素敵です、英雄様っ！」

今日も究極の変人、九鬼英雄とメイドの忍足あずみは相変わらず騒がしかった。

そして用事が済むと嵐のように学園に向かって行った。

英雄が去った後、大和たちは何事も無かった様に学園に向かった。

sideセリカ

エクリアと俺は今、川神学園の校長室にいる。
そして目の前には鉄心がイスに座っていた。

「朝早くよくきた、先日実施した編入試験じゃがまあまあの出来じや。歴史などこちらの世界に関することは出来なくてもさほど心配せんでよいぞ」

「そうですか」

エクリアは緊張を解いた。

「してクラスなんじゃが2年F組にしようかと思う。F組は問題児が多いが仲間想いの者が多い。きっと気に入るじゃろうて。一子もおるので仲良くしておくれ」

「わかりました」

エクリアは再度頷いた。

しばらくしてドアが開き、1人の女性が現れた。

「お呼びでしょうか学園長？」

「小島先生、こちらの2人は今日からF組に編入することになったセリカとエクリアじゃ。どうかよろしく頼むぞい」

「わかりました。」

そしてセリカたちに向き合い

「私の名前は小島梅子、F組の担任をしている」

「エクリア・フェミリンスです」

「セリカ・シルフィルだ」

「2人とも女子か・・・クラスの男子が騒ぎそうだな」

小島先生は2人の容姿を見てそう言った。

そこに毎度ながらセリカは自分の性別を小島先生に言うのであった。

side 2—F

朝のホームルーム前は人それぞれ十人十色だった。

寝ている者、食べている者、修行している者、話している者などで溢れかえっていた。

しかし1つの号令で皆同じ行動にでた。

「小島先生が来ましたよー！！」

全員が席に着き静まり返っている。

ドアが開きF組の担任、小島先生が入ってきた。

「朝のH Rをはじめる」

挨拶、出欠を取りH Rが終わりだとクラス全員が思ったが、小島先生は話を進めた。

「以上、H Rはこれまで。なのだから・・・」

小島先生は一旦言葉を切り再度続けた。

「急ではあるが今日、このクラスに編入生が入ることになった」

今の言葉にクラスは騒ぎ始めた。

「静粛につー!!」

クラスは一瞬で静まった。

「質問があるものは挙手して行うように。何かあるか？」

「女子ですか？ 美人ですか？ 胸とがありますか？」

「男子ですか？ イケメンとか、お金持ちですか？」

などクリスの時のような質問だった。

「小島先生、どちらなのでしょう？」

その質問に小島先生は

「慌てるな、もう来ている。自分たちの目で確かめろ」という返答が帰ってきた。

小島先生が入って来いと言い教室のドアが開いた。

入ってきた2人を見たクラスの連中の様子は大きく分けて3つ。

男子は興奮状態、女子は嫉妬や羨望、その他はこれからの仲間になるという期待だった。

「では2人とも自己紹介を」

「はじめまして、エクリア・フェミリンスといいます」

「セリカ・シルフィル」

自己紹介が終わった途端、クラスは嵐のような声で埋まった。

「金髪の子、可愛くね、マジ可愛くねええええ!?!」

「今回も、超・超・あたりなんですけどおおお!!!!」

「なんだあゝ2人とも女子かあゝ」

などの意見が飛び交っている。

「こらっ! お前たち、静粛に!!」

児島先生がクラス全員に呼びかける。

「何か質問あれば挙手していけ」

「はいはいはい！！！！」

一番手にガクトが手を挙げた。

「では島津。常識を保ってな」

「オッス！えーと、セリカ？」

「なんだ？」

ガクトはセリカに質問した。

「セリカは彼氏がいたりすんのかな？」

またクリスと同じ質問してるし、と大和は思った。
セリカは

「彼氏なんていない」

その言葉にガクト含めクラスの男子はにやけたがセリカは続けて

「行って置くが俺は男だ」

と核ミサイル級の爆弾発言をした。
クラスの時間が数分間停止した。

「お、お、男？？」

ガクトは油が切れたぜんまい人形のような動きで聞き返した。セリカは“そうだ”と答えた。

[illegible]

川神学園全体に響くような声がF組から放たれた。

今の答えて男子は放心状態の者もいれば、なにやら悶絶している者もいた。

女子の方は男であるセリカに負けたことで落ち込んでいた。

「エクリアの方もセリカの従者なので男子はちよつかいをだすなよ」と小島先生はとどめの一撃と男子に食らわした。

「では2人とも空いているスペースに席をいれるがいい」

「全員仲良くするように、以上」

そう言い残すと小島先生は教室を後にした。

残った生徒はほとんどが今起きた事を理解することができなかった。

第4話 新学期（後書き）

今回はクリスと同じように“歓迎”をするか迷い中です。
早くセリカVS百代になるようにしたいと思います。

ご感想ご意見もお待ちしています。
ではまた次回

第5話 決闘

休み時間になるとセリカたちの周りには多くの人だかりができていた。

セリカが男と知って女子もなにやら活気だっていた。

「ねえ、セリカは彼女とかいないの？」

と小笠原は言った。

セリカはいないと言うと女子は大いに騒いだ。

「ちょっとチカリンどうした系？」

羽黒は小笠原に話しかけた。

「セリカってなんだかイケてない？」

「そう？アタイは普通系ってカンジ」

などと話し込んでいた。

一方エクリアは男子に質問攻めを食らっていた。

「なあなあ、エクリアって服装的にもかしてメイド？」

ヨンパチはそうエクリアに言った。

セリカとエクリアは川神学園の制服は着ないでいつもの服を着ていた。

クラス内では浮いている存在だったが皆は特に気にしなかった。

「ええ、セリカ様の身の回りの世話をやらせていただいています」

そう答えると男子たちは喜び半分、セリカに対する嫉妬や羨望半分の心境だった。

「まあ、S組のあのメイドよりか全然マシだけどな」

ガクトはそういった。

周りの男子もウンウンと頷いていた。

side 2—S

「へっくしょん!!」

「ん? どうしたあずみ。もしや風邪か」

九鬼はあずみを見てそう言った。

「いえ英雄様、誰かが私の噂をしていたと思います☆」

「フハハハハ!! あずみは最高のメイドだからな!!」

「ありがとうございます、英雄様☆!!」

そう答えると英雄はあずみから視線をはずした。

その瞬間、あずみの笑顔が消えた。

(この感じ・・・誰かがあたいのことを馬鹿にしてるな。見つけ次第殺す!)

そんな状況をF組の男子は気づこうすら思わなかった。

昼休みになったときにはセリカたちのことは学園全体の噂になっていた。

廊下には学年問わずセリカたちを見ようと人がいっぱいであった。セリカとエクリアは川神院からもらった弁当を食べているとスピーカーから音声が流れた。

「ハアイエブリバデイ、夏休みも終わっちゃてみんなだらけていかなかな？今日もラジオ番組LOVEかわかみをはじめるよ」

「パーソナリティーは俺子供大好き（幼女限定）2年の井上準と・・」

「世界の女子は全部私のもの。3年の川神百代だ」

「今日は噂の編入生について話そうと思います」

「ぶっちゃけモモ先輩、編入生のことはどう思いますか？」

「そうだな、2人とも超がつく程の美人だがセリカは男だ。注意しろよ」

「幾人かは新しい世界に入ってしまっそうっすね」

「まあそんなことはいい。おいハゲ私は今からセリカのところに行くからな」

「ちょっとモモ先輩！逃げないでくださいよ」

「黙れロリコン」

バキ、ドカ、グシヤ

「司会のハゲがなにやら気絶したんで曲流すぞ」

そう言い数秒後百代はセリカの元にいた。

「なんだ俺に用か？」

「ああ、お前に用だ」

そう言いつつ百代はセリカの机に自分のワッペンを叩きつけた。

「私と勝負しろ、セリカ！！」

クラスは騒然となっていた。

あの”百代先輩”が勝負を仕掛けた？
編入生はそんなに強いのか？

クラスや廊下の野次馬は話していた。

（どうするのだセリカ？）

袋に包まれていた魔剣ハイシェラは呟いた。

セリカ自身はどうでもよかったが、百代の目は真剣《マジ》だった。
セリカは断るのは無理だと判断し”俺はどうすればいい”と百代に聞いた。

「自分のワッペンを私のワッペンに重ねろ。そうすれば決闘だ！」

セリカは自分のワッペンを重ねた瞬間、それを見ていた野次馬は大騒ぎとなった。

風間ファミリーは、

「おいモモ先輩が決闘かよ」

「すごく興味があるね」

「おっしゃ！決闘トトカルチョだ。みんな張った張った！！」

「大和、京、手伝え！人手が足りないぞう」

などとお祭り状態だった。

「まったくモモのやつめ。あれほと言ったにもかかわらず・・・」

騒ぎを聞きつけた鉄心がF組に現れた。

「おいじじい、審判をたのむぞ」

「わかつとるわい！2人ともグラウンドに移動せい」

セリカと百代はグラウンドに向かった。

グラウンドには全校生徒が見物人達が集まってくる。
さすがに学園最強の百代が決闘と聞けばみんなが集まってくるのは
普通か。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！」

「2人とも、前に出て名乗りをあげるがいい！」

「3年F組 川神百代！」

「2年F組・・・セリカ・シルフィル」

「わしが立ち会い、決闘を許可する」

「勝負がつくまで、何があっても止めぬ。が、なにかあればわしが
介入するぞ、良いか？」

「ああ!!」

「・・・」

「モモは拳、セリカは剣じゃな。セリカが持つ剣は刃止めをしてお
るか？」

（大丈夫だ、我の方で調整はしたぞ）

ハイシエラは鉄心の質問を俺に言った。

「問題はない」

鉄心に剣を見せる。

「うむ、大丈夫のようじゃ。では・・・」

「いざ尋常に、はじめいっ！……！！……！！……！！」

開幕と同時に2人は激突した。

第5話 決闘（後書き）

次回はセリカと百代の戦いがメインです。

上手く書けるが心配ですが、

頑張ってみます。

では次回もお楽しみ☆

第6話 戦いの行方 前編（前書き）

予告通りセリカと百代の戦闘シーンです。

技は自分なりに作ってみたものがあるのでご了承ください。
ではどうぞ

第6話 戦いの行方 前編

川神学園のグラウンドでは多くの学生と熱気で包まれていた。
学園最強VS噂の編入生の戦いが今繰り広げられていた。

「はあっ！」

「ハッ！」

剣と拳が幾度となく交差する。

「やるな！ 私とここまでやり合う奴は久しぶりだ！！」

百代の必殺の威力を持つパンチをセリカは剣で受けるが後ろに吹っ飛ばされた。

しかし体勢を立て直し剣を構える。

（まったく、なんてデタラメな攻撃をするのだあの譲ちゃん。私の乙女肌が傷だらけになってしまう。）

（セリカ、あやつの攻撃を正面から受けるな！ 剣で受け流し反撃し一気にケリをつけようぞ！！）

ハイシエラはなにやら嬉しそうに言ってきた。

（楽しそうだな？ ハイシエラ）

（当たり前よ。世界を放浪し強敵とあまり戦わなかったからの。私の血は滾っておるぞ！！）

セリカはハイシェラとの会話を一旦やめて百代を見た。
楽そうにしているが隙はなく殺気を放っている。

セリカは剣を振り上げた。

「飛燕剣・滅鋼斬^{めつこうざん}！」

剣を振り下ろすと百代に向かって衝撃波が放たれた。

「しやらくさい！ 川神流無双正拳突き！」

百代は衝撃波を拳で吹き飛ばした。

土煙が舞ったが百代は片手で吹き飛ばす。

そしてセリカのいる所を見たがセリカはいなかった。

「終わりだ」

セリカは土煙に紛れ百代の背後に接近していた。

そしてセリカは攻撃を仕掛けた。

「飛燕剣・身妖舞^{しんようぶ}！」

セリカは剣を斬りあげる。

百代は腕に気を集中させ両腕で剣をガードしたが、勢いに負け空高くに飛ばされた。

「まさか私が押し負けるとはな・・・」

百代は笑いながら体勢を立て直し次の行動にでた。

「これを避けられるか！？ 川神流星群！」

百代が連打によって発生した拳圧が雨のようにセリカに襲い掛かる。しかしセリカは冷静に対処した。

「ハイシエラ、これは全て受け流せないかもしれない」

（この攻撃は仕方ない・・・が出来る限り受け流せ）

「わかった。・・・飛燕剣・沙綾紅燐剣！」
さやこうりんけん

セリカは拳圧の嵐を高速剣で次々と相殺していった。

百代が着地した時には、セリカは全ての拳圧を落とし百代を見ていた。

壮絶な戦いを見ていた観客達は口をあけて静かになっていた。両者を見守るエクリアと風間ファミリーは驚いていた。

「おいおい、セリカって滅茶苦茶強くねーか！？」

「あのモモ先輩と互角の戦いをしてるよ」

ガクトとモロはそう言い一子、クリス、まゆっちは

「ねえクリ、セリカの剣筋見えた？」

「いや、まったく見えなかった。まゆっちはどうだった？」

「辛うじて見えました。でも私にはあのような高速剣は無理ですね」

今の言葉を聞いた風間ファミリーは驚いた。

武道四天王にして剣聖・黛十一段の娘でもある彼女よりも剣技で勝っているなんて信じられなかった。

キャップは戦いを見て目が輝いていた。

戦いを見た大和は隣にいるエクリアに話しかけた。

「なあ、セリカってあんなに強いのか？」

大和はエクリアに聞いてみた。

「強い？そうですね・・・セリカ様は他の者に狙われる存在だったので」

エクリアは思考しながら答えるが、大和は“狙われる”の言葉が引っかかった。

「狙われている？誰に」

「私達の世界の者からです。言っていないかもしれませんが私達はこの世界の住人ではありません」

大和は動揺したがすぐに冷静になり話を聞いた。

「セリカ様は世間では神殺しと呼ばれていました。私が生まれるずっと昔にセリカ様は女神を倒し、女神の身体を手に入れたと言われています」

「そして女神の力欲しさに魔物などに狙われる存在になりました」

「女神の力を手に入れた・・・だからあんなに強いのか」

「しかしリスクもありました。神の身体に人間の魂は圧力に耐えられないので、感情と昔の記憶を失ってしまいました」

「家族のことも、なぜ女神と殺したことも・・・」

話が終わり大和はエクリアにお礼を言った。

「いろいろと教えてくれてありがとう」

「いえこちらこそ。それと今のことは他言無用でお願いします」

「わかったよ」

2人が話していると京が割り込んできた。

「大和くなに浮気してるの？私という妻がいながら」

「俺はまだ独身だ！変なこというな」

「大和メイド服見てにやけてたでしょ。私ならいつでもいいよ♪」

「結構です」

3人はそんなことを話ながら戦いを見守っていた。

セリカと百代は一定の間隔をとり相手の様子を窺っていた。
一瞬の隙が勝敗を決すると両者は慎重に機会を待つ。
数秒後、先に出たのはセリカだった。
百代に接近しながら手を前に出した。
すると百代の場所に稲妻が降り注いだ。

（やったか？）

「いや、避けられた」

百代は素早く避け一氣に間合いを詰める。

「川神流無双正拳突き！」

百代から鋭い拳が飛んでくる。

セリカは紙一重でかわしカウンターを狙うが

「それは囷だ。川神流力鎌かまいたち太刀！」

百代の凶悪な蹴りがセリカに当たる。

セリカは校舎に向かってぶっ飛ばされ壁にめり込んだ。

「くっ！？」

（大丈夫かセリカ！？）

ハイシエラはセリカの安否を確認する。

セリカは咄嗟に剣でガードしたので直撃だけは免れた。

セリカは立ち上がり百代に向かっていく。

「今のは結構いいと思ったんだけどな」

百代は先ほどの蹴りをやりながらそう言ってきた。

セリカは深呼吸をして低く剣に手を置き構えた。

構えは居合いの姿勢に似ている。

百代はセリカが構えた瞬間、背筋に電流のようなものが走った。

百代はすぐに構えをとる。

（今の感じ、次は恐らく強烈なのが来るな！）

百代は武人の本能で危険を感じ取った。

「ハイシエラ・・・行くぞ」

（よいぞ、このままでは魔神ハイシエラの名に傷がつくからの！）

「魔神剣・雷光地烈斬！」
らいこうちれつざん

セリカは百代に神速の一閃を放つ。

前の衝撃波よりも速く、強烈な電撃を帯びていた。

百代はこれを受けずに避けるがセリカはもう百代の目の前にいた。

「魔神剣・雷光身妖舞！」
らいこうしんようぶ

百代はガードが間に合わずセリカの攻撃をモロに当たった。

なんとか耐え反撃しようとしたが電撃を帯びた斬撃を食らったせいで身体が痺れていた。

セリカはさらに追撃を仕掛ける。

「飛燕劍・弧武身妖舞、沙綾身妖舞！！」

セリカは容赦なく攻撃を浴びせる。

「このお！！」

麻痺が解け百代は反撃したが難なくかわされてしまった。
セリカは百代にとどめの一撃を放った。

「魔神劍・雷光紅燐劍！！！！」

百代の身体中に斬撃が叩き込まれ百代は校舎に頭から突っ込んだ。
そして百代いる壁が崩れ百代生き埋め状態になった。

（おぬし・・・相手は一応女子だぞ。もう少し手加減をせんか！！！）

なぜかセリカはハイシエラに怒られていた。

鉄心は百代の所に近づいた。

セリカはもう立ち上がれないと思い背を向けた。

しかしセリカはまだ気づいていなかった。

瓦礫の隙間から息を吹き返した暴君がセリカを見ていることを・・・

第6話 戦いの行方 前編（後書き）

次回は後編となります。

マジこいの戦闘は結構疲れる・・・

そんなことで次回もお楽しみ♪

ご感想や気づいた点がありましたらご指摘ください。

第7話 戦いの行方 後編（前書き）

ボクの夏休み〜BAD END

夏休みが終わっちゃった（涙）

そんなこんなで後編です。

どぞ

第7話 戦いの行方 後編

セリカは校舎に斬り飛ばした百代に背を向けていた。

ガードが出来ない状態から3連撃を与え百代は立ち上がれないと思
いエクリアの所へ向かう。

観客達はセリカと瓦礫に埋まっている百代を見ている。
剣を鞘に収めようとしたが、

（セリカよ、まだ譲ちゃんはやる気があるようだぞ）

ハイシエラの言葉でセリカは後ろをゆっくり振り返る。

瓦礫が吹き飛び中から傷だらけの百代が姿を現した。

流血もしており戦いは続行できそうにない感じだった。

（ものすごい精神力だの。かなりの修羅場を経験しているようだ）

「そのような。だが・・・」

「なに1人でぶつぶつ言っている。勝負はこれからだろ！」

百代は声を張り上げた。

しかしセリカは百代に言う。

「だが今のお前は満身創痍な状態だ。そんなでは俺には勝てないぞ」

「心配無用だ、すぐに治る」

百代はそう言い全身に気を集中させた。

するとみるみるうちに怪我が治っていく。

遠くにいたセリカも傷も治癒が確認できた。

「ハイシェラ、あれは回復魔法か？」

（いや違うな、彼女自身の技かもしれん。底が知れん相手よ）

百代は瞬間回復により傷は完全に治りグラウンドに戻ろうとする。すると近づいていた鉄心は百代に話しかけた。

「お前が瞬間回復を使うとはな、それほどの相手だったか？」

「ああ、さっきの攻撃で一気に瀕死状態だ。揚羽さん以上の強さだ！！」

「この戦いは早々終わらしたら勿体ない！！」

百代はそう言い残して歩きだした。

百代はグラウンドに戻り、振り出しに戻った。

「タフだな。それとあの回復速度も」

「そうか？おまえも私を倒すなら徹底的やらなければ無理だぞ！！」

「そのようだな。今度こそ沈めてやる」

「やるチャンスがあったらなっ！！」

百代が間合いを詰める。

セリカはバックステップをして後退するが百代はそれを阻止する。

「川神流・土隆壁！」
どりゅうへき

百代が地面を殴るとセリカの後方に3つの巨大な壁が現れた。退路は前方しかないが、百代が塞いでいる。セリカは壁に背中をつける。

「逃げ場はないぞ！これで終わりだ」

百代が鬼神の如くセリカに必殺の攻撃を繰り出す。まさに絶体絶命の状態もセリカは諦めない。

左右の壁を交互に蹴り上がっていった。

百代の攻撃は前の壁を粉々に吹き飛ばしただけだったが、百代の攻撃は止まらない。

「空中ならこれでどうだ」

「川神流・星殺し！！！」

百代はセリカに向かってエネルギー砲を射出した。避けようとするが極太すぎてセリカは剣で防御する。

ハイシエラは魔法障壁を展開するが強力過ぎる破壊力を持つ百代の攻撃で障壁に亀裂が入る。

（このままでは障壁がこわれるぞ！）

ハイシエラはセリカに危険を伝えるがセリカは魔剣に魔力を込め障壁を強化した。

エネルギー砲が消え、セリカは地面に着地した。

障壁で直撃には至らなかったがかなりのダメージを受けていた。

「私の星殺しを喰らって倒れないか。お前も頑丈じゃないか」

百代は愉快そうにセリカに言った。

（セリカよ、このままでは御主に勝ち目はないぞ）

ハイシエラの言う通りセリカには百代のような瞬間回復など持っていない。

長期戦になればセリカに不利な戦況になる。

セリカはゆっくり呼吸を整えた。

「試してみるか・・・」

セリカは手に魔力を集中させる。

手の平には握りこぶしくらいの電撃を凝縮させた光球が浮いている。

セリカは光球を剣に押し当てる。

魔剣は凄まじい音と光を放った。

（これはなかなか堪えるっ！！）

「多少我慢をしてくれ」

セリカはそう言うのと百代に向かって走った。

「何を企んでいるかは知らないがこれでも食らえっ！」

「川神流・凶刃双牙^{きょうじんそうが}！」

百代から気弾が放たれた。2つの三日月の刃がセリカに向かう。セリカは避けるがさっきのダメージが響き一撃肩に当たった。

肩の服が裂け血が滲む。

しかしセリカは走りをやめないで間合いを詰める。
距離にしてあと5メートルほどのところでセリカは行動に出る。

「雷神剣・剛！」

雷撃を纏う剣が百代に目指して斬りつける。

百代はまた麻痺になると思い素早く後ろに跳躍する。

剣は百代の胸5センチ手前を空振りした。

「ふう、危ないところだっ・・・！」

いきなり百代に電撃が駆け巡る。

常人なら一歩間違えれば致命的なダメージだが百代はなんとか耐えていた。

身体中から煙が立ちのぼり足元がおぼつかない。

「完全に避けたはずなのに・・・！！」

百代は状況がうまくわからなかった。

セリカが持つ剣を見る。

剣は電撃を纏っており鈍い光を放っている。

目を凝らして見てみるととても薄い膜が剣を覆っている。

「そうか・・・私は“膜”の方に触れていたのか」

「よくわかったな」

百代の答えにセリカは答える。

「目を凝らさなければ見えない攻撃だ。剣に当たればそれ以上の電撃が流れる」

（我にとってはあまり使われたくない技よ）

もう電撃が治まった剣からハイシエラは言った。

百代はすぐさま瞬間回復をしようとする。

しかし瞬時に回復するはずがなかなか傷が治らない。

（さっきので回復に支障が出てるのか！？）

百代は気を集中しようとするがセリカがそれを阻止する。

「回復はさせないっ！」

セリカは百代に止めを刺すべく剣を振るう。

百代は攻撃を掠めながらも剣を避ける。

両者ともボロボロで勝負は長くは続かない。

セリカは剣を振るったが大振りとなってしまう隙が出来てしまった。

百代は隙を見逃さずセリカに仕掛ける。

「川神流・無双正拳突き！」

ボキッ、バキッ

セリカのわき腹から嫌な音になる。

セリカは飛ばされ地面に転がる。

当たってはいけない攻撃が当たってしまいハイシエラは慌てた。

（セリカよ！ 無事か！？）

動かないセリカにハイシェラは声をかける。
セリカは弱弱しく身体を起こす。

「ああ、なんとか大丈夫だが・・・ろっ骨を2、3本やった」

セリカは吐血しながら立ち上がる。

本来なら粉砕骨折でもおかしくない怪我になるはずだが、百代もダメージが蓄積していたようで攻撃に力があまり入らなかったようだった。

「力が入りきらなかったか・・・うっ！」

突然百代の右腕に激痛が走った。

見てみると肩から肘にかけて深く挟られていた。
腕を動かそうしてみるがまったく動かない。
血が垂れて指先から地面に落ちる。

「飛ばされる時にやられたのか・・・なんて奴だ」

百代はセリカの方を見る。

向こうもすでに虫の息だ。

「セリカ、そろそろ終わりにしよう！ 最後の攻撃で立っていた方が勝者だ！！」

百代はそう言い

「私はこの拳に全ての力を込める！！」

百代は左の拳に気を溜め始める。

「望むところだ」

セリカも残っている魔力を剣に集中させる。
2人は準備が出来ると同時に前にでた

「これで終わりだああああ！！！！」

「禁じ手・富士砕き！！！！」

「飛燕剣・枢孔紅燐剣！！！！」

2人の剣と拳が勢いつけてぶつかった。
2人の中心から衝撃波が発生し観客達の中の何人かは勢いで飛ばされた。

鉄心はちゃっかり気で障壁を張り防御していた。

衝撃波が治まり土煙が晴れてきた。

観客達は2人がいる場所を見ると2人ともうつ伏せで倒れていた。

鉄心は2人に近づき様子を見る。

そして・・・

「両者とも気絶しておる。よってこの勝負は引き分けじゃ！！！！」

鉄心は判決を下した。

その言葉に学園で大きな歓声が響き渡った。

目を開けるとセリカは和室の布団の中で横になっていた。全身に包帯が巻いており見た目は重傷患者に見える。

セリカは身体を起こそうとするが痛みが生じ再び布団に落ちる。しばらく天井を見ていると隣の襖から百代が出てきた。

「よう、怪我はどうだ？」

「まあまあだ」

「ここは？」

「川神院だ。学校じゃ治療ができないからじじいが私たちを運んだらしい」

そう言うとき百代はセリカの隣に座り込んだ。

百代は右肩に包帯が巻いており他の怪我は完治しているようだった。セリカの視線に気づき百代は

「右腕の怪我はまだ完治していない。瞬間回復もまだ本調子じゃないらしい」

「お前のあの攻撃が原因だ」

百代はそう言った。

セリカは話を無言で聞いていた。静かに時間だけが過ぎていった。

「お前は強いな」

百代はポツリと呟いた。

セリカは百代をみると顔が笑っていた。
まるで無邪気な子供のようにだと思った。

「私とまた戦おう、セリカ」

百代はセリカに再戦をしようと言った。

「機会があればな・・・」

セリカは軽く返事をした。

返事を聞いて百代は部屋を出て行った。
しかし、しばらくするとまた百代は戻ってきた。

「そうだ、忘れるところだった。これはお前のだろ？」

百代の手には魔剣ハイシェラは握られていた。

百代はセリカにむかって魔剣を放り投げた。

魔剣は布団の上に落ちる。

「それじゃあちゃんと休めよ」

そう言い百代は廊下を走って行った。

百代が居なくなったのを見計らってハイシェラが話してきた。

（あの譲ちゃんは物を丁重に扱わんかまったく・・・してセリカよ）

（見事に重傷だの。ここまで御主がやられたのは久しぶりじゃな）

「ああ、とても強敵だった」

（あの譲ちゃんは人外の力を持った存在だの。我もできれば一戦してみたいものだ）

ハイシエラは面白そうに言っていた。

「エクリアはどうした？」

（エクリア譲ちゃんならまだ学園じゃ。もうすぐ帰ってるくるじやろ）

ハイシエラはいろいろ話していたがセリカはゆっくり眠りにおちていった。

百代はご機嫌な様子で廊下を歩いていた。

「なんじゃモモ、お前怪我はもういいのか？」

同じく廊下を歩いていた鉄心とルー師範代が百代に近づいてきた。

「右肩以外は平気だ」

百代は鉄心に答えた。

「なんだか機嫌いいネ、百代」

百代の様子を見てルー師範代は聞いてきた。

「ああ、久しぶりに楽しい戦いが出来たからな。セリカも機会があれば再戦すると言ってたし」

百代は嬉しそうに鉄心とルー師範代に言った。

「喜ぶのは結構だけど怪我を治しなヨ」

「わかつている」

そう言い百代はその場を後にした。

ルー師範代は鉄心に言った。

「百代は楽しそうダ」

「そうじゃな。好敵手の存在というのは、いいのうやはり」

「こういってはなんですが、セリカに感謝ですネ」

「うむ」

鉄心とルー師範代は笑いながら廊下を歩いた。

第7話 戦いの行方 後編（後書き）

百代との一騎打ちが終わりました。

次回は長めに書くつもりなので遅れるかもしれません。
ではお楽しみに♪

第8話 激戦からの日常(前書き)

くく投稿くだよ(ノへへ)ノ

第8話 激戦からの日常

百代の決闘から3日後、セリカは傷も癒えエクリアと学校に登校していた。

全治1ヶ月のはずの骨折も2日で治っていた。

セリカはいつもの緑色の服だったがエクリアだけは違っていた。

白と黒が入っている服・・・川神学園の制服だった。

「エクリア、なんだその服は？」

「昨日クラスの人と話していたんですけど、女子から制服姿が見たと言われまして鉄心さんに相談したんです」

「そしたらすぐに制服を頂けたので今日着てみました。・・・似合っていますか？」

そう言ってエクリアはなぜか赤くなっていた。
セリカはエクリアを再度見て、

「別におかしくないぞ」

「そう・・・ですか」

エクリアはスタスタとセリカより先に歩く。
会話を聞いていたハイシェラはセリカに怒る。

（御主は乙女心がわからんのか！？）

「生憎身体は女神でも心は男だ」

（そんなことは聞いておらん。女子が服が似合っているか聞いてきたら似合っていると褒めるのが常識じゃ！）

「そんなのは初耳だ」

（・・・御主、さらに常識を忘れてきておらんか？）

「俺はそこまで忘れてはいない」

ハイシェラと常識話を聞きながらセリカは川神学園に向かった。

校門に着いたセリカはやけに視線を感じた。

周りの生徒がセリカのことを見ている。

セリカは心話を通してハイシェラに話す。

（俺はなにかしたのか？）

（大方、先日の決闘じゃろうて。御主のことを恐れているのかもしれない）

セリカが校門で突っ立っていると後ろから肩を叩かれた。
振り返ると百代と一子、あと後ろに男女が固まっていた。

「セリカこんなところだなにしてる？」

百代はセリカに言った。

「周りから視線を感じてな・・・」

周りを見渡しながらセリカは答えた。

「それは私と戦って引き分けだからだろう。私と戦う生徒はあまりいないからな」

「もう学園中で噂になっているわよ。お姉さまと互角と力をもった美少女とかなんとかって」

百代と一子はそう答えた。
すると後ろから、

「もうセリカを知らない生徒はいないかもしれないよ。ある意味女子から人気があるし」

「それにしてもお前強いよな。こっちはおかげで大儲けできたぜ！
！ お礼になんかご馳走するぜ」

キャップと大和が気軽に話しかけた。

「なんだキャップ、私には奢らないのか？」

「モモ先輩はいいでしょ、女子に奢ってもらったんだから」

「それとこれは話が別だ。どうやらお仕置きが必要のようだな」

「ちよっ・・・！！ 八つ当たりにもほどがあるでしょ！！」

「問答無用だ！そおくれ〜」

「うわあああああああ！！！！！！」

キャンプは遙か遠くに飛んでいった。

大和はセリカに手を出した。

「改めまして、直江大和だ。今後ともよろしく」

「あと今飛ばされたのは風間翔一って言うんだけど皆はキャンプで呼んでる」

「ああ、よろしく」

セリカは大和と握手した。

後ろにいた男女たちもセリカに挨拶をしてきた。

「俺様は津島岳人。ガクトって呼んでくれ」

「ボクは師岡卓也。モロって呼ばれてるよ」

「初めまして、1年の黛由紀江といいます」

「クリスティアーネ・フリードリヒだ。クリスと呼んでくれ」

「（ツーン）」

「悪い、こいつは椎名京っていうんだ。人見知りが激しくてな」

「俺たち全員集まって風間ファミリーだ」

飛ばされたキャップがいつの間にか戻ってきていた。

「風間・・・ファミリー？」

セリカは首を傾げた。

疑問そうだったセリカに百代は答えた。

「昔からの幼馴染、家族みたいなやつさ。みんなでいれば無敵ってな」

「そういうことさ！一応俺がこのチームのキャプテンだからな」

キャップは腰に手を当て偉そうにしていた。

そんなことを話していると予鈴のチャイムになる。

「おいやべーぞ、遅刻したらウメ先生の鞭打ちを喰らっちゃおう！！」

「よーし、誰が一番か競争だ！！」

そう言いキャップが風のように走る。

続いて一子とクリスが同時に走る。

「勝負よ、クリ！」

「負けんぞ、犬！」

2人は肩をぶつけながら教室を目指した。
百代とまゆっちはすでに姿がなかった。

「俺たちも早く行こうか」

残った大和たちは猛スピードで下駄箱へ走った。

「ファミリー・・・家族・・・か」

セリカはポツリと眩き、ゆっくりと教室へ歩いていった。

セリカが教室に着いたときはセリカ以外の生徒は着席しており、担任の小島先生が教卓に立っていた。

「セリカ、出席は取りを終わったぞ。なぜ遅刻した？」

「歩いてきたからだ」

小島先生の質問にセリカは答える。
周りからは微かに声が聞こえる。

（これは鞭打ち決定だな・・・）

（あいつすごい度胸だな）

（セリカ様・・・）

周りの意見は色々だった。

小島先生は自慢の鞭を構える。

「しかし遅刻は遅刻だ！ 教育的指導！！」

セリカに高速の鞭が迫るがセリカはそれをよける。

それでも攻撃は止まらず速度と威力がどんどん増していく。

セリカは無表情で難なく鞭をかわす。

「こらっ、セリカ！なぜ避ける！？」

「攻撃されたら避けるだろ」

2人の攻防をクラスの連中は面白がって見ていた。

数分後、無駄だと思ったのか小島先生は攻撃を止めた。

「もうよい、今日は勘弁してやるが次はもうないぞ！」

小島先生はそう言い残し教室を後にした。

セリカは自分の席に着くと周りに風間たちが集まってきた。

「お前度胸あるな。ウメ先生の指導をあしらった奴は初めてだ」

「それより鞭が一発も当たらなかったよね」

「やっぱお前は面白いわ！！」

キャップは笑っていた。

「ねえねえ、よくあの攻撃かわせたわね」

正面にいた一子が聞いてきた。

「別に大した事はない。軌道を読めば楽だ」

セリカは一子に簡単に説明した。

説明が終わるとチャイムがなったのでみんな席に戻る。

（御主は人気者じゃな）

（いきなりなんだ）

（我らがいた世界では忌み嫌われ標的になる存在だったが、この世界ではそんなことはない）

（そうだな）

（ここが御主の安住の地かもしれんぞ）

（だが俺にはやることもある）

（そうじゃな・・・ってなんだあやつは？）

セリカが顔を上げると教卓には白い顔の男が立っていた。
周りの人間とは明らかに異質な存在だった。

セリカは隣にいたガクトに聞いて見た。

「おい、あれはなんだ？」

「あれは日本史担当の綾小路、通称マロってやつだ。気をつけろよ、結構うるさい教師だ」

ガクトはそう言うとかの作業を再開していた。

（我はあれが魔物に見えるぞ。クックック）

ハイシエラは笑っていた。

セリカは授業に興味がないのか窓の外を見ていた。

「・・・であるからして、平安時代におけるう・・・？」

マロは窓の外を見ていたセリカに気づいた。

「セリカく貴様！！ 麻呂の授業をきいておるのか！！！！」

マロの怒声が教室に響く。

セリカはゆっくり黒板に目を向けた。

なにやら文字のようなものが書いてある。

「問題じゃ、平安時代はいつから始まった？」

（セリカ、御主分かるのか？）

ハイシエラがセリカに聞く。

（興味がない）

（そうだと思ったわい。で、どうする？ アレはかなりキレておるぞ）

マロの顔は白から赤に変色していた。

周りからしてみたらはつきり言ってキモイの一言
しかしセリカは更なる爆撃を投下した。

「知らないし、興味がない」

マロの目が一気に血走った。

顔は変形しそうな勢いだった。

「貴様……マロを……馬鹿にしてるでおじやるか!!!!!!!!!!」

手に持っていた扇子を投げるがそれをセリカは避ける。
後ろで寝ているキャップに扇子が命中した。

「イタッ！ ふぁーなんだよ授業終わったの……か？」

キャップは変貌したマロを見て絶句した。

大和は今までの出来事をキャップに素早く報告する。

「おいおい、それってやばくないか？」

「うん、多分マロの逆鱗を撫でるっていうより蹴り上げたって感じ」

大和は冷静に状況を分析する。

もうマロにはなにも聞こえない状況だろう。
なにかしら手を打たないと後々面倒になる。

大和は脳をフル回転して解決策を考える。

一方セリカはマロの怒声を無表情で聞いているが

（ええい！ネチネチ五月蠅い奴じゃ）

ハイシェラはマロの説教でどんどん機嫌が悪くなっていく。

（セリカ、こやつを一瞬で気絶させてしまえ）

（大丈夫か？）

（心配するな、我が記憶を消去する。ガツンをお見舞いしてやれ）

ハイシェラはセリカに言いつけた。

そんなことも知らないマロはまだ怒っていた。

「だいたい貴様は編入生の方で麻呂に無礼でおじやる！！」

「麻呂の権力で貴様なんぞ一瞬で・・・え」

話の途中でマロは顔面から倒れた。

マロの後ろには瞬時に移動し手刀を食らわしたセリカが立っていた。

その光景を見たクラス全員が言葉をなくした。

大和も考えを中断してセリカに近づく。

「なにやってんだか・・・。退学になるよ」

気絶したマロを見ながら大和はため息をついた。

「大丈夫だ、こいつの記憶を消すから問題はない」

セリカはそう言い魔剣をマロの上に置いた。

「そんなことできるの?」

「ああ」

セリカは短く頷いた。

セリカは気づくと周りのクラスメイトがにやけていた。

「なんでみんな笑っている?」

セリカは大和に聞いてみた。

「こいつはF組にとっては嫌いな教師だったからね。みんな喜ぶに決まってる」

「そうか・・・」

（楽しい話の途中で悪いが記憶はもう消したぞ。早くこいつから離してくれ、錆びてしまう）

ハイシエラを拾い上げる。

あとはコレをどうするか・・・

「教卓のイスに座らしとけばいいんじゃない?」

「そうそう、起きるまで私たちは自由時間♪」

クラスから意見が出たので言われたようにイスに座らせ授業は自習となった。

授業も日本史以外では何事も起こらず昼休みになった。

セリカはエクリアと弁当を食べていると放送が流れた。

「ハロウ、エブリバディ〜今日もLOVEかわかみの時間がやって参りました」

「パーソナリティーは幼女の仏、2年の井上準と」

「ナイスバディの美少女、3年の川神百代だ」

「それにしてもモモ先輩、もう怪我は大丈夫っすか？」

「この通りもう復活したぞ」

「ただだだ!!!腕を掴まないでください!!!」

「まあ遊ぶのはそれくらいにしてさっさと手紙を読め、ハゲ」

「はいはい、まったく。え〜と第1通目」

「『モモ先輩はまたセリカさんと再戦するんですか?』だそうですが?」

「いずれはまた再戦するつもりだ。セリカ首を洗って待っている!」

「セリカくんよ、逃げたほうがいいってマジで。この人ヤル気満々だから」

「余計なことを言うな、このロリハゲ!!!」

バキッ、ドゴッ、グシャー

「片役は寝てしまったので音楽流すぞ」

そう言い放送が終わった。

（御主また戦うつもりか？）

ハイシエラが聞いてきた。

セリカは無言で弁当を食べている。

（まあお前の自由だがの。せいぜい死なない程度にやるがいい。怠けて弱くなっていただと洒落にならんからな）

「しかし我も譲ちゃんとは1対1で戦いたい。そんな機会があればいいのだがな」

ハイシエラはそんなことを思っていた。

放課後はセリカとエクリアは川神院へ歩く。

セリカはエクリアを見た。

この世界にも慣れて楽しそうに見える。

「エクリア、この世界は楽しいか？」

セリカはエクリアに聞いてみた。

エクリアは少し考え

「あちらの世界にはないことが沢山あるので楽しいですね」

「セリカ様はどうですか？」

「俺はどっちでもない。いつもどうりだ。だが・・・」

「この世界には俺の捜し求めているものがあるんだろうが？」

セリカはそう言い遠くを見ていた。

「きっとあると思います」

エクリアはそう言って先に歩いて行った。

セリカは先に行ったエクリアを見た。

フッ

（む？　今御主笑わなかったか？）

「そうか？」

そう言いセリカは手を振っているエクリアも元へ歩き出した。
川神院に着くと中からなにやら音が鳴っていた。

中に入るとルー師範代と一子が稽古をしている。

一子が薙刀で攻撃し、ルー師範代がそれを受け流していた。
遠くからセリカは一子の剣筋を見た。

（攻撃が単純すぎる、あれではすぐに見切られてしまうぞ）

ハイシエラが一子の剣筋を見て感想を言った。

セリカもハイシエラと同じことを思った。

攻撃に緩急がない・・・ただ真っ直ぐしか打ち出さない。

あれで実践をやるのは厳しいと思った。

ルー師範代がこちらに気づいたのか稽古を終えた。

「やあ、お帰り」

「ただいま戻りました」

「あつ、セリカたち帰ってきてたんだ」

一子が汗をタオルで拭いながら寄ってきた。

「稽古か？」

「そうよ、いっぱい修行して川神院の師範代になるの」

そう言いタイヤを引きずってどこかに言ってしまった。
その姿を見たセリカはルー師範代に話した。

「師範代になるのは難しいのか？」

「そうだね、天賦の才能を持つ一握りの者だけだよ」

「あいつになれるのか？」

「・・・・・・」

ルー師範代は間を空けて答えた。

「正直に言ってしまえば難しいヨ、君たちもさっきの稽古を見ていたよネ。どうだった？」

「攻撃が単純、緩急がない。実践では致命的な欠陥だ」

「そうだね、一子には才能が足りない。けどあの努力は無駄にしないヨ」

「できれば君も一子の修行を手伝ってもらえないだろうか？」

「私はいつでも大丈夫ですよ」

エクリアは笑顔で答えた。

（御主もどうせ暇じゃろうて。多少稽古でもしてあげてみよ）

ハイシエラがそう言ってきた。

「別に問題はない。アイツが言ってきたら相手をしてやる」

セリカはそう答えた。

ルー師範代はセリカたちにお礼を言った。
すると早くも一子はランニングから帰ってきた。

「あれっ？まだそこに居たの？」

一子はそう言ってダンベルを持っていた。

ルー師範代は今までのことを話すと一子は目が輝いていた。

「2人とも私と修行を手伝ってくれるの!？」

「ああ」

「いいですよ」

セリカたちは頷く。

すると一子は薙刀を構えてセリカに向ける。

「じゃあ、セリカ私と勝負してよ」

「わかった、少し待ってろ」

セリカは魔剣を抜き構える。

ル一師範代とエクリアは遠くから観戦している。

「じゃあ、行くヨ。2人とも・・・始めっ!」

「やああああ!!!」

先制したのは一子だった。

自分より大きい薙刀を横一線に振る。

セリカは後退して紙一重で避ける。

「まだまだ!!!」

一子はセリカとの間合いを詰めながら薙刀を振りまくる。

セリカは攻撃を受け流し、紙一重で避けるなどして後退し続ける。

しかしもうセリカ背中が壁についた。

退路が無くなった知った一子は決めにかかる。

「川神流奥義!!!!」

薙刀を大きく振りかぶり

「大輪花火!!!」

セリカに力を込めた攻撃が振り下ろされた。
しかしセリカは一子との間合いを一気に詰めた。

「えっ!!」

一子の攻撃はセリカの右手で止められていた。
そして左手には剣を持っており

「飛燕剣・身妖舞^{しんようぶ}！」

攻撃は一子の鳩尾に当たった。

一子は声を上げる暇も無く気絶してしまった。

「・・・うん？」

しばらくして一子は目を覚ました。

「一子、あまり身体を動かすのはダメだヨ。ダメージがまだ残ってるからね」

「・・・勝負は？」

「一子は負けたヨ。鳩尾に一撃喰らって」

「そっか・・・」

一子は落ち込んだがすぐに元気を取り戻した。
そしてセリカに自分と戦い方を聞いた。

「一子の攻撃は単純だから緩急をつけるといい」

「あとは勝機でも緊張を解かないことくらいか」

「うーん」

なぜか一子は頭を抱えていた。
説明がおかしかったのかセリカは思ったが

「ごめんヨ、一子は難しいことが苦手なんだヨ」

と、ルー師範代がフォローしてくれた。

しばらく一子は考えていると何かを思い出したかのように聞いてきた。

「セリカは私の技を止めたじゃない。あれってどうやったの？」

「薙刀は相手が自分に近いほど威力が半減していくから一気に間合いを詰めた」

「あそこまで近ければダメージは無いに等しい」

「一子は相手を自分に近づけないように戦えば有利になる」

「なんだか難しいけど相手を近づけなければ私が有利ってことだよ

ね？」

「ああ」

「わかったわ、これから意識しながらやってみる！！」

そう言い一子は素振りを始めた。

ルー師範代は一子の素振りを見ていた。

（御主もいい師匠になれるんじゃないかの？）

ハイシエラが今の話を聞いてセリカに言った。

セリカは無言でその場を後にし家の中に入ってしまった。

第8話 激戦からの日常（後書き）

文章を読んだ人は気づいた言葉があると思います。
多分あのお方を出すと思いますのでご期待ください。

そろそろセリカにゆかりがある人物を登場させたいと考えております。

候補としては知っている人は知っている人物

魔神ナベリウスとリタ・セミフを出したいと思っています。

OKな人は？

NGな人は？

を感想に書きちゃってください。他にもなにか希望がありましたら感想にお書きください。

では次回お楽しみ♪

第9話 古き戦友（前書き）

だいぶ遅れの投稿となります。三人だけですがアンケートを書いていただきありがとうございます。

ご期待どうり？ 2人を登場させました。
ではどうぞ

第9話 古き戦友

真夜中の川神院でセリカは目を覚ました。

門がある方角に強大な魔力を感知したからだ。

セリカは魔剣を待ち部屋を出た。

「なんだお前も起きたのか」

部屋から出ると廊下には鉄心と百代がこちらに歩いてきていた。

「ああ、門の方に誰かがいる…」

「私も感じた。気量は私と同格レベルだな」

「ここではなんじゃ、皆して門のほうへ様子を見て来ようかのう」

鉄心の言葉で3人は門のほうへ向かった。

太陽もまだ出ない漆黒の空には無数の星々が光っており、月は雲に隠れていた。

セリカは空を見上げていたが百代に引っ張られながら門に近づく。

門に着いた頃には気配が一層濃くなっていた。

この門の先に何かがいる。

百代は未知なる存在に興奮していたがセリカは違った。

（この感じは……俺は知っている？）

扉の先にある気配はセリカにとって不快なものではなかった。
むしろ感じたことがある感じだった。

(うゝむ、この気配は知っているが名前が出てこん…っ!!)

ハイシエラも知っているようだったがうろ覚えのようだった。
そんなことをしている間に鉄心は門のかんぬきを外していた。

「おぬしら、よいか？」

そう言い鉄心が門をゆっくりと開けた。

門を開けた先には2つの人影があった。

月明かりがないのではっきりと見えないが背丈は子供くらいだった。
しかしなかなかの威圧感があった。

両者は無言で相手の様子や素性を窺っていた。

すると雲に隠れていた月が現れ、周りが徐々に明るくなっていった。
そして2人の容姿が確認できた。

セリカたちの前にいた2人は幼い女子だった

片方は金髪に赤と紫が混ざった服を着ており、背は小学生並みだった。

もう片方は白い長髪に黒と紫が混ざった服、そして手には目立つほどの禍々しい槍が握られていた。

2人の女子は警戒していたがある人物を見た途端、警戒を解いた。

「……主……やっと見つけました……」

「……セリカ……みつけ……」

そう言いセリカのほうに駆け寄り左右にしがみついた。
セリカは誰かと思ったが、ふと頭の中に言葉が浮かんだ。

「……ナベリウスと……リタ……か？」

セリカは2人の名前らしき言葉を言った。

「名前……覚えてる……！」

「主……まだ覚えていてくれたんですね……っ」

2人は覚えていたことに感激し泣いていた。
それを見たハイシェラは言った。

（しかしなぜお前たちがここにいる？ セリカよ聞いてみよ）

ハイシェラに言われたようにセリカは2人に聞いてみた。

「主の気配がいきなり消えたので私たちは主のことを探していました」

「……タルちゃんに……おやすみもらった……」

「それで冥き途にあるこの世界に繋がる門に主の気配が微かに感じたので門くぐってきました」

「……かえったら……タルちゃん……カンカン……かも？」

2人の説明にハイシエラは大体は納得していた。
するとハイシエラは気づいた。

（ならばナベリウスがくぐった門を我らがまた行けば元の世界に帰れるではないか!?!）

ナベリウスに今から元の世界に戻れるか聞いてみたが首を振った。

「私たちがこの世界に来るのには何十年の月日がかかりましたから
すぐには無理です」

「……そうか」

セリカはそう言い抱きついている2人を見た。

2人は久しぶりに会えて嬉しいのか、なかなか離してくれなかった。

「おいセリカ、イチャついているとこ悪いんだが……」

今まで蚊帳の外だった百代が話しかけてきた。

「その2人はお前の知り合いか？」

「ああ、2人とも俺の知り合いだ」

セリカの答えを聞いて百代は2人を交互に見た。
そしてセリカに一言

「お前……ロリコンなのか？」

百代はセリカのことをロリコンだと思っていた。

しかしロリコンの意味を知らないセリカは首を傾げていた。
セリカと百代が話している所に鉄心は割り込んだ。

「これ2人とも、今はまだ夜中じゃ。話なら朝にすればよかろう」

鉄心の説得で2人は黙った。

「モモは部屋にもどつとれ。セリカはワシの部屋に立ち寄るがよい。
少し話がある、お嬢さんも一緒にじゃぞ」

百代は渋々自室に戻っていった。

セリカは鉄心の部屋に向かった。
部屋には鉄心が正座で座っていた。

「来たか、ほれ2人とも座るがよい」

鉄心はセリカとナベリウスだけに言った。

「あの……私は？」

何も言われてないリタは戸惑っていた。

鉄心は笑顔でリタに言った。

「おぬしは好きにすればよいぞ。浮いてても問題ないじゃろう」

鉄心の言葉にリタは驚いた。

「いつから気づいてたんですか？」

「姿を見たときじゃな。常人には分からないと思うがワシの目は誤

魔化されんぞ。あとはおぬしから生気が感じられんのじゃが……」

鉄心はリタを見た。

リタは自分が霊体であること打ち明けた。

「まさか幽霊を見れるとはのう。長生きは良いことじゃわい」

鉄心は驚いたが逆に喜んでいた。

そしてセリカに聞いた。

「この2人はおぬしがいた世界の仲間かの？」

「ああ、共に戦ってくれた戦友だ」

「そうかそうか」

鉄心はセリカの話面白そうに聞いていた。

一方ナベリウスとリタは鉄心の周りで遊んでいた。

「わーい……ながいおひげ……」

ナベリウスは鉄心の髭を掴んで引っ張っていた。

「頭がツルツル☆」

リタは鉄心の頭をペチペチ叩いている。

「まったく、ひ孫ができた感じじゃわい」

鉄心はあながち嫌ではないようだった。

しかし夜中なので遊びをやめるようにナベリウスに言った。
部屋に戻ろうとするセリカに鉄心は声をかけた。

「セリカよ、2人の布団はどうするつもりじゃ？」

鉄心と言葉にナベリウスたち2人は

「主の布団で寝るわ」

「セリカと……一緒に……ねんね……する……」

そう言いセリカの手を引っ張って行ってしまった。
鉄心は3人の背中を温かく見ていた。

朝になりセリカとエクリアは学校に行く準備をしている。
エクリアはナベリウスとリタの再会を心から喜んでいた。
準備をしているセリカと隣でまだ眠たそうなナベリウスとリタが布
団の中で寝そべっていた。

「主は今からどこに行くんですか？」

リタはセリカに聞いてみた。

「学校という場所だ」

「学校？」

リタは首を傾げていた。

準備が終わったセリカたちは学校に行こうとするがナベリウスたちがついてこようとしていた。

さすがにまずいと思ったのかエクリアは2人に留守番するように言っていた。

「仕方ないわ、では主いつてらっしゃい」

「セリカ……いつてら……しゃい……」

2人の見送りを受けてセリカたちは川神学園に向かった。

今日の天気は快晴、雲ひとつない青空だった。
セリカたちは変態の橋を通る。

「ああ……、幼女を愛でると幸せだぜ」

橋で女の子を見ている準はそう漏らした。

「ジャスティン・キック!!」

「ぶるふぁっ!!」

準は後ろからキックを喰らい、前にずっこけた。

「朝から何やってるんだよ、ハゲ♪」

「おいユキい？　なにやってくれんだよ」

「準が馬鹿丸出しだったから」

「今俺は幼女を慈愛の目で見つめていたんだが。」

「それがダメなんだよ。このロリハゲ☆」

「人に向かってストレートに中傷することを言っ
てはいけません！
」

「ん？　らんらんる」

「だから危ない発言も禁止!!」

「準、ユキ。学校に遅れますよ」

変態の橋は今日もおかしな人でいっぱいだった。

午前の授業が終わり昼休みになった。

セリカたちは昼食にしようと思ったがセリカの動きが止まった。

「どうしたんですかセリカ様？」

エクリアがセリカの様子を見て聞いた。

「弁当の箸がない……」

セリカは広げた弁当に箸が無い事に気づいた。

仕方ないので食堂から持ってこようとしたが廊下から名前を呼ばれた。

呼ばれたほうを振り向くとドア際にスキンヘッドが目立つ準が立っていた。

セリカは準のほうに向かった。

「俺を呼んだか？」

「ああ、俺は井上準だ。校内放送で流すネタを聞きにきたんだが……」

「別に構わないが……」

そう話していると準の後ろから2人の男女が現れた。

「実際見て見ると……いい身体してますね」

「うっほほーい」

「若にユキ!？」

準は驚いた。

「あなたがセリカさんですか。私は葵冬馬といいます。ユキ挨拶しなさい」

「榊原小雪だよ」

自己紹介をしているとセリカの後ろを誰かが突いた。セリカは振り返るとなぜかナベリウスとリタがいた。

「……セリカ……」

「主、忘れ物です」

そう言いナベリウスの手には箸が握られていた。

「届けにきたのか？」

セリカの言葉に2人はコクンと首を縦にふる。

セリカは箸を受け取り2人の頭を交互に撫でた。その様子を見ていた準がセリカに言った。

「セ：セリカ、そのお嬢さんはどなたかな？」

その視線はナベリウスに注がれていた。

視線に気づいたナベリウスは準のことを見た。
なぜか準は穏やかーな顔をしている。

「俺の知り合いだ。名前はナベリウス、それとリタだ」

セリカは2人の紹介をした。

（うーん、片方はどストライクだが……もう片方はギリアウトだな、くっ、もったいない）

準は2人を見てはぶつぶつと言っていた。
そんな準をナベリウスはじっと見ていた。

「俺になにか用かなお嬢さん？」

準は腰をおろしナベリウスと同じ目線で話しかけた。

「……つるりん……してる……♪」

そう言い準の頭をぺちんと叩いた。

「人の頭を叩いてはいけませんが……お嬢さんなら許す（慈愛の目）」

そう言い和んでいた。

小雪も準の頭を叩いていた。

「準はハゲの中のハゲだからね☆」

「……わーい……」

「ねえ、マシユマロ食べる？」

「…………たべる…………あまゝい…………」

どうやらナベリウスと小雪は相性が良いようだった。

その後鉄心が2人を迎えに来て、ナベリウスたちは渋谷川神院に帰っていった。

セリカの隣にいる準はなぜか涙を流し帰っていくナベリウスを見ていた。

第9話 古き戦友（後書き）

次回からは川神大戦に向けての話にしようかなと思います。

川神大戦は大和が百代に勝った後の第2回戦だとお考えください。

これ以上は完成予定の話をご覧になってください。

川神大戦で何かこうして欲しいとか要望などもドシドシ感想にお書きください。

次回お楽しみに

第10話 戦いの火蓋（前書き）

どうも、黒★猫です。

大変長くお待たせしました。

久しぶりの投稿です。

なんでも飽きやすい体質ためやる気の炎が乏しいですが今回はちょっと頑張れる感じがします。

ではお楽しみ下さい

第10話 戦いの火蓋

昼休み、Sクラスで今両者の間で火花が飛び交っていた。

「庶民の分際で此方に齒向かうなど命知らずめ!!」

「なによ勝負なら負けないわよ!!」

不死川と一子はお互いに睨み合い一触即発な状態だ。

一子の後ろには大和、京そして委員長の小島が、不死川の後ろには冬馬、小雪、英雄などのSクラス代表らがいた。

「てめえ!!委員長を馬鹿にしやがったなあああ!!!!!!!!」

そしてSクラスのクラスメイトを準が修羅の如くボコボコに叩きのめしていた。

なぜこうなったかは朝のHRに遡る。

くFクラスく

「Sクラスとですか？」

小島は担任の小島先生に再度聞いた。

「うむ、今度Sクラスと合同でスポーツ大会の作業をすることになった。そこで昼休みに作業の打ち合わせに行ってきたもらいたい」

「私は大丈夫ですが……」

甘粕は了承するが他の生徒は反対のようだった。

「なんで俺たちがSクラスと一緒に作業しなくちゃいけないんだ？」

「どうせ全部俺たちにやらせる気だ」

色々な発言がクラスで飛び交っている。

小島先生は鞭を床に叩いた。

「静粛に！！もう決まったことだ。では甘粕昼休みにSクラスに行ってきたくれ」

そう言い残し教室から出て行った。

そして昼休みになり甘粕はSクラスに行こうとした時、

「委員長、俺も一緒にいくよ」

大和が甘粕に向かって言った。

「大和ちゃんいいんですか？」

「この前の恒久和平みたいになったら大変だし、一応護衛も付いてるし」

そう言うとは京と一子が付いていた。

「護衛なら任せて！」

「大和の貞操は私が守る」

ある意味頼りになる護衛だった。

そして大和たちはSクラスに向かった。

「失礼します」

Sクラスの扉を開けると視線が大和たちに向く。

「委員長、今日もいい天気ですね」

どこから現れたのか準が甘粕の近くに立っていた
そして冬馬たちも大和たちに近づいてきた。

「こんにちは、大和君。もしかして私に会いに来てくれたんですか
？」

大和に触れようとするが京が大和の前に出て大和を守る。

「違う。九鬼に用がある」

「そうでしたか……それでは英雄」

冬馬が英雄を呼んだ。

冬馬に呼ばれ英雄が来た。

「なんだトーマ、我に用か？」

「いい私ではなく彼らがあなたに用だそうです」

冬馬が大和たちを指差す。

「む、貴様らか。我は忙しい早く言わんとこの場を去るぞ」

そう言うが大和は一子にサインを送った。

「あのく九鬼くん？ 話だけでも聞いてくれないかな？」

「っ一子殿！！！！ 一子殿の頼みなら何でも聞きましょう！！！！」

「あ、ありがと……」

「では、用件を言いますね」

甘粕はスポーツ大会の作業のことを九鬼に話した。

「うむ、話はわかった。F組との合同作業か……」

「はい、ですからお互いに頑張りましょう」

「そうですね、私は賛成です」

「トーマが良いなら僕も☆」

いい雰囲気の話が進むと思っていたが、ある人物の一言で雰囲気が崩れだした

「なぜ高貴なる此方たちが、山猿と共に作業しなければならん？」

「雑用はFクラスにやらせればよからう」

近くにいた不死川が話に食いついてきた。

それに賛同したかのように周りから反対の声が出てきた。

「で、でも……」

甘粕が反論しようとするがSクラスの生徒が甘粕に言った。

「それくらいF組がどうにかしろよ。それともF組の委員長はそれも出来ない屑ってことかな？」

その言葉に甘粕は下を向いて黙ってしまった。

そこへ一子の鉄拳が先ほどの生徒に直撃した。

「友達を馬鹿にされて黙ってられないわ!!」

「おぬし…また手を出したな！ 相変わらずこれが蛮族のやり方か!!」

「アンタたちも仲間に攻撃したじゃない」

「うるああ!! おい、てめえこの間も委員長を馬鹿にしてただろう？ 今回は無事ではすまねえぞ!!」

一子に殴られた生徒は準によって処刑された。

くそして現在く

両者は言い争い睨み合っている。

「あああ準落ち着いて。もう気絶しています」

気絶しても追い討ちをかけている準を冬馬が止めに入る。

「何がお互いに頑張りましたようじゃ！ どうせ無理な話なのじゃ！」

「相変わらずの蛮族など、此方等に管理されるべきなのじゃ」

「アンタたちとこっつとん曲がってると思うわ！」

互いが、戦闘体勢に入る。

「蛮族の分際で此方に齒向かうなど命知らずめ！！」

「なによ勝負なら負けないわよ！！！」

2人が動き出す時

「もうやめて下さい！！！！」

甘粕の声が教室に響き場が静まった。

「なんでいつも分かり合えないんですか！？」

「お互いに協力しようって言ってるのに……」

甘粕は涙目で声を振り絞って言った。

そしてドアが開き、Sクラス担任の巨人が現れた。

「お前たち……またケンカしてんのか？ ヤメヤメ」

巨人が解散させようとするが、不死川は下がらない。

「いいや、川神だけは五体満足で帰さぬ。これでは示しがつかん」

「おいこら、やめろって言ってんだろ、まったく」

「耳障りじゃこの独身ダメ教師が。引っ込んでおれ！」

「うわあ、今度は独身ダメ教師かよ……今のは結構効いたぞ」

「まったく……今のは傷ついちゃったぞお」

「なんじゃ？ この加齢臭ジジイ」

「あんまり大人怒らすんじゃねえぞ糞餓鬼が」

「ひっ!？」

巨人の威圧感に不死川が悲鳴を漏らす。
場が落ち着いたところに鉄心が表れた。

「話は聞かせてもらった」

「!？ じーちゃん」

「ほんとにお前たちは仲が悪いのう」

「そんなに優劣を永久にはっきり決めたいならば……」

大和は鉄心が今から言うことをなにやら嫌な予感がした。

（まさか……またアレをやるつもりじゃないかな？　そうだな！
？）

鉄心に視線を送ると鉄心は視線に気づきにやりと笑った。
そして両者に言った。

「第2回　SクラスVSFクラス　川神大戦をすればよい」

鉄心の言葉に大和は脱落した。
巨人も鉄心に言う。

「また……あれをやるんですか？」

「うむ、ぶつかり合うのが一番よかろう」

鉄心は愉快そうに言った。

冬馬は大和に近づいた。

「また頭脳を使った勝負ですね。今度は負けませんよ大和君」

「こっちも軍師として負けられないんでな……全力で潰すぜ」

早くも軍師とも戦いが始まっていた。

「川神、貴様は此方がこの手で引導を渡してやるのじゃ!」

「望むところよ! 逆に返り討ちにしてあげるわ」

そして一子と不死川も同様に宣戦布告をしていた。
英雄もこの件に賛成のようだった。

「……うむ、やはり勝負が一番いいかもしれん」

「前は敗れたが今回は我が勝者となろう!!! 二度の敗北は九鬼の名に傷がつく」

「そうですね、英雄様!!! (これで黛にリベンジができるぜ!!!)」

互いに合意のうえでその場は解散となった。

「と言う訳でSクラスと川神大戦をすることになった」

Fクラスに帰還した大和たちはクラス全員に事情を説明した。

「マヨを馬鹿にされて黙ってられないわ!」

甘粕と親友の小笠原が声を張り上げた。

「そうだな、仲間を馬鹿にされて黙ってられないぜ」

「戦争か……また情報戦の始まりかな？」

クラスでも色々な意見が出ていた。

事情の知らないセリカとエクリアは何が起こっているのかまだわからなかった。

その様子に大和はいち早く気づき、2人に説明した。

「ではつまり両方の大将の首を取ればそのクラスの勝利ということですか」

「まあ、大まかはそんなとこだよ」

大和の説明にエクリアは大体は理解した。

そして大和は話を続ける。

「前回と同じく他のクラスから兵を集める必要がある。各自他のクラスの知り合いなどに声をかけといてくれ」

クラスの全員は大和の指示に頷いた。

すると教室のドアが開いた。

「ようう、やゝまゝとゝ」

出てきたのは嫌な笑みをした百代だった。

「またSクラスと大戦をするんだってな。悪いが今回も私はお前たちの敵だ。前回の屈辱を倍にして返してやる」

早速百代は精神的にFクラスに攻撃してきたみたいだった。

大和は大体は予想していたようで然程驚かなかった。
しかし次の言葉で大和の予想を大きく覆した。

「さらになんと今回はまゆっちもお前たちの敵だぞ」

そう言い隠れていたまゆっちを引っ張って後ろから羽交い絞めにした。

「あうあう」

羽交い絞めにされているまゆっちはテンパッていた。

「今回は私も真剣^{マジ}で行くからな、覚悟しておけ!!」

そう言い百代は笑いながら教室から去っていった。

「おい大和、どうする？ まゆっちが今回敵になっちまったぞ！」

クラスは騒然となる。

それでも大和は冷静に分析する。

「こっちにはセリカがいる。姉さんは阻止できるはずだが……」

問題はまゆっちの存在。

武道四天王の1人であり学園では屈指の強者である。
それを誰が止めるかが作戦のネックになっていた。

（クリス、京、一子は前線で使うから外せない……どうしたらいいんだ？）

大和は頭をフル回転して考えるがいい案が浮かばなかった。

「大和、まゆっちの件は後にして兵士を集めようぜ」

キャンプの意見で大和は思考を中断した。

そして放課後は携帯を片手にクラスを回った。

川神院でセリカは剣を手入れしていた。

戦いが近いぞとハイシェラに言われ剣を磨いている。

（にしてもなかなか面白い学校じゃな）

大戦のことでハイシェラは心なしか舞い上がっている。

それでもセリカはあまり関心がないようだった。

しばらく手入れをしていると

「おおセリカ、丁度よかった」

鉄心がセリカに近づいてきた。

「じつは大戦の用意で使うものがあるので倉庫に行くのじゃが、おぬしも探すのを手伝ってくれんか？」

断る理由もないのでセリカは剣を持って鉄心と倉庫に向かった。
セリカたちは倉庫に着いた。

倉庫はかなり大きく扉には頑丈な鍵がしてある。

鉄心が扉の鍵を開け扉を開けると中は薄暗く埃まみれだった。

「では探すかの」

そう言いセリカに探すものを言い鉄心は奥の方に行ってしまった。
セリカは言われたものを探しはじめた。

かなり多くのものが置かれており腰に差している剣が邪魔だった。
セリカは剣を近くの台の上に置く。

（これっセリカ！ さっき綺麗にしたばっかじゃろうが！！）

埃まみれの場所に置かれたハイシエラは文句を言うがセリカはそれを無視した。

ある程度のもので探し残り少なくなってきたところでセリカは不安定のところにある武器を取ろうとした。

（セリカ、それを取ってはものが崩れ落ちるのではないか？）

不安そうにハイシエラはセリカに警告した。

しかしセリカは武器を普通に取る。

案の定積み重なっていた置物が音を立てて崩れていく。

セリカは何とか回避したがハイシエラはそうはいかない。

棚に置いてあった瓶がハイシエラに向かって落ちようとしていた。

（こ、これセリカ！！ 落ちるっ、瓶が落ちるぞ！！！！）

セリカに救援を求めるハイシエラ

落ちようとする瓶を取ろうとハイシェラに近づくセリカ
あと少いで剣に手が届く距離だったが……

「バリーン!!」

棚から落ちてきた瓶が剣に直撃し中に入っていた液体が剣や辺りに
飛び散る。

（このたわけっ!! もっと早くに我をたすけっ……?）

「どうした?」

なにやらハイシェラの様子がおかしいことにセリカは気づいた。

（……身体が燃えるように熱い……これは一体……?）

そう言うハイシェラが宿る剣から大量の煙が出てきた。
そして倉庫は煙で充満した。

川神大戦の話が勃発して三日が経った。

大和に兵士などの情報がどんどん入っている。前回の勝者とあって集まり具合もなかなかいいって良いほうだった。百代がSクラスに行くのでFクラスは劣勢になると思ったが百代と同格の強さを持つセリカのおかげで帳消しになったようだった。しかし大和はまだ悩んでいた。問題はもちろんまゆっちだった。集まっている兵士ではまゆっちを止めることが出来ない。

「まったく、姉さんやってくれるよ……」

大和は大きなため息を吐いた。まゆっちになぜSクラスに入ったか聞くと

「そ、それが……モモ先輩に騙されてしまって契約書みたいのにサインしてしまっただけです……（泣）」

だということだった。

仕方なく大和はまゆっちを諦めるしかなかった。もしなにか細工をすればきっと悪魔が来るだろう大和は思った。そんなことを考えているとセリカが大和に近づいた。

「ん？ どうしたのセリカ」

大和はセリカを見た。

「話を聞いたんだが……外部の人を50人まで入れることが出来るんだよね？」

「そうだね。だから慎重に選ぶ必要があるよ」

「その件で話がある」

「いいよ、それで？」

「じつは俺の連れで大戦に参加したいといわれたんだ……」

「連れ？ 友達かな」

「そんなところだ」

「……ふうん」

大和は考え、話を再開した。

「何人？」

「2人だ」

「セリカから見てその人たちは強い？」

「そうだな……戦いは慣れている。前線で戦ってきた事もある」

「なるほど、戦力になるね。考えとくよ」

そう言い作業を再開しようとする大和にセリカは続ける。

「それとあと1人いるんだが……いいか？」

なにやら深みがある言葉に大和はセリカの声に耳を傾けた――――

大戦開幕の1週間前、勧誘合戦はだいたい終わった。
Sクラスは校庭、Fクラスは体育館で決起集会をしている。

「前回より集まってるな。これはいけるぜ！」

「うん、戦力もだいたい五分五分って感じだよ」

体育館に集まった人数を見てキャップとモロは言った。
そしてクリスが台に登った。

「静粛に静粛に！　これからF軍の決起集会を始める」

「まずは、総大将の甘粕真与、解説！」

「は、はいっ！」

甘粕が台に向かって歩くが、

「うわあっ！」

こけた。

前回も同じようなことがあったような感じをそれを見ていた生徒は
思った。

「えー皆さん、今回も川神大戦を開催させてしまいました。今回も

よろしく願います!!」

そう言い甘粕はトコトコ去っていった。
続いて大和が生徒の前に立った。

「今回も俺が軍師をやらせてもらうことになった、直江大和だ」

「今回も姉さん……川神百代がSクラスに行ってしまったがこちらにも切り札がある!!」

そう言い大和はセリカを指差した。

「F軍には姉さんと同格の実力を持つセリカがいる。こちらにも勝機はあるはずだ。みんな今回もS軍を完璧に叩き潰そうぜ!!」

大和の号令で会場に集まった生徒から歓声がわき起こった。
そして大和はクリスとキャップを呼んだ。

「クリスとキャップ、今回も各部隊の隊長に任命する」

「わかった、任せよう」

「いいぜ、待ってましたってか」

クリスとキャップは大和の指示に従った。

「では部隊の名前を決めよう」

「またか? 後でいいだろ」

「いや重要なんだ！　これだけは重要なんだ！！」

クリスはなにやら興奮している。

「前回と同じで白の隊、黒の隊でよくねえか？」

キャップがクリスに言うが納得していない。

仕方なく大和が案を出した。

「じゃあ、クリスは戦いが好きだから……ヴァルキリー隊ってのはどう？」

「ヴァルキリー隊？」

クリスは首を傾げた。

大和はヴァルキリーの意味をクリスに教えた。

「戦女神か……気に入った！！」

クリスは納得したようだ。

「大和お、俺にも俺にも」

キャップが自分の隊の名前を希望した。

「キャップは風のようなからな……風神隊でよくない？」

「風神隊か……カッコいいぜ！！」

両部隊の名前がどうにか決まった。

「じゃあ2人とも、精鋭部隊の作ってくれ」

「任せろ大和!!」

「完璧に仕上げてみせよう!!」

2人は期待ができる返事を大和に返した。

～大戦3日前～

一子と源が率いるF軍本隊は校庭で部隊の強化をしていた。

「おらっ！　そこ反応おせえぞ!!」

「みんなあと校庭5週よ!!」

2人の厳しい訓練も生徒たちはついていっていた。
そこに大和が2人を呼ぶ。

「なんだ直江？　なんか用か」

源が大和に言う。

「うん、2人の部隊に2人の助っ人が入ることになった」

「そうなの！ で、一体だれ？」

一子は尻尾を振っていた。

「セリカの知り合いのリタとナベリウスって女の子だ。ワン子は知ってるよな？」

「うん知ってるわ。そっかゝあの子たちが参戦するんだ」

「それで実力はどれくらいなんだ？」

源が助っ人の実力を聞く。

「実力は申し分ない。前線で存分に戦えるタイプだよ」

「そいつはありがたいな。こっちの突破力も上がるだろう」

「リタって子は槍を武器に使うからワン子と一緒に切り込み隊長でいいと思う。ナベリウスは後方からの援護をする感じだからそっちで調整しといてくれ」

「わかった、部隊の編成はこっちに任せて、直江は作戦を頼むぜ」

そう言い源と一子は訓練に戻っていった。

大和も自分のすべきことをやりに校内に戻った。

今、川神学園は壮絶な戦いが幕を下ろそうとしていた

第10話 戦いの火蓋（後書き）

次回は川神大戦の開戦です。

話数を分ける？と思うので頑張って書こうと思います。

どちらを勝者にしようかと思っています。

F軍の勝利でいいすっか？

なにか『これがいい！』とかあったら感想に書きちゃって下さい。
ではまた次回にお会いしましょう。

第11話 川神大戦 (1) (前書き)

久しぶりの投稿です。
ではどうぞ

第11話 川神大戦 (1)

ついに、川神大戦の日がやってきた。

Fクラスの全員が決戦の地・丹沢へと向かう。

「まさかまた川神大戦が行われるとはな……」

電車に乗ってきたクッキーはそう漏らした。

もう第二形態になっており戦闘意欲がボディーからにじみ出ていた。

「しかし大和、今回はモモ先輩はともかくまゆっちゃんもS軍に行ってしまったぞ。どうするつもりだ？」

まゆっちゃんが敵だと知ったクッキーは大和に言う。

「その件は問題ない。セリカたちが解決してくれた」

「セリカ？ ……ああ、モモ先輩と戦ったという奴か。それなら期待できそうだな」

「それはどうかな？」

大和たちが振り返るとそこには百代とまゆっちゃんがいた。

「今回はまゆっちゃんがF軍にいない……絶望的じゃないか」

百代はにやにやしながら大和に言った。

しかし大和は負けじと百代に言う。

「いや、今回も姉さんは俺たちに負ける」

「そっちが私を止めるのにセリカを使うとしてまゆっちを止める奴
がいない。私たちの勝利は決まっている」

「それは勝ってから言いなよ姉さん？」

「あー。今すぐにいたぶってやりたいが今は我慢だ。だが負けたら
どうなるかわかっているんだろうな」大和？

そう言い両者は火花を散らせながら、丹沢に向かった

丹沢では、今回も多くの参加者達が集結うしていた。

「お前達、覚書を書いていない者はいないなー！！」

「まだ書いていない者は必ず書くように！！」

小島先生は最終確認をしていた。

「よう、大和。またマスコミがわんさか来てるぞ」

「またかよー！！」

「ああ、ほらむこうでもう実況中継されてる」

スグルが人だかりの方を指差す。

「また雪広アナだぜ！ マジたまんねえ。激写激写」

そう言っていると20人ほどの人が大和に向かってきた。

「直江殿、今回もよろしくお願いします」

「こちらこそ」

「われら川神院、師範代候補20名……」

「前回と同じく、僧兵隊としてご助力致します」

「今回もありがとうございます」

「また結界を張るくらいしか出来ませんが……」

「いえ、それだけでも心強いです」

「屈強の修行僧がまた20人も味方とか頼もしいぜ」

「士気が上がってきているな」

そしてあと20人は不良達も参戦してきた。
どの不良も目がギラギラとしていた。

「待たせた。訓練がてらに走ってきたぜ」

キャップの風神隊は、全員目が本気だった。

前回よりもさらに精鋭部隊に仕上がっている。

間違いなくF軍のエースたる部隊だった。

「こちらの部隊も問題はない、確実にいけるぞ」

クリスも自信ありの顔だった。

女性のみで構成されたヴァルキリー隊も、士気が上昇している。
まさに戦女神の名が相応しい部隊だった。

「F軍本隊も、200人揃ったぞ。あと大和……」

「なんで俺の部隊にこれがいるんだ？」

そう言い隣にいるナベリウスを指差す。

「助っ人で入るって言ったじゃん」

「そうだがまだ子供じゃねえか!!」

「そこはゲンさんが守ってあげなよ」

「ふざけんなっ!!! ……ん？」

源が隣を見るとナベリウスは源のズボンを掴んでいた。

「ちっ、しかたねえ引き受けたよ。まったく」

源は渋々引き受けた。

一子の方にはリタがいた。

「今日はよろしくね、ワン子ちゃん」

「こちらこそ、リタ」

お互いに決戦に向け挨拶をしていた。

「それで大和、本隊から本陣設営へ何人まわす？」

「……100人」

「今回も多いな。まあいいだろう、どうせ合流するだろう」

まあ、それは相手次第かな。

葵冬馬はどうでてくるか……

（S軍本部）

こちらでもF軍と戦うための準備をしていた。

「ほほほ、少し人数が少ないが精鋭が多いの此方の軍は」

「ええ、150人ですが多少我慢してください」

「うむ、問題ないじやろう」

「前回のような失態は起こさないようにしてください」

「わかっておるわー！ー！！！！」

不死川は冬馬に向かって叫んだ。

「マルギッテ、今回はいけますね？」

「ああ、万全の状態だ」

「今回も精鋭50人を預けますので存分に指揮して下さい」

「了解した。任せなさい」

「フハハハハ！ では軍を配置してみるか！」

「…英雄。あなたは今回も総大将。自覚していますか？」

「もちろんだトーマ。我が軍300人で敵を呑み込む」

「また戦場ではアリーナ位置がいいんですね？」

「うむ。英雄たるもの、自ら道を切り開くのが王道なのだ」

「分かりました。準、英雄のフォローを頼みますよ」

「またかよ……。若の頼みだから仕方ねえが」

「またこやつが我の親衛隊？　もっとマシな奴は居らんのか」

「お前それが守ってもらおう態度か？」

「ふん。まあトーマの言うことなら特別に聞いてやろう」

「では、各軍配置に。国境線は越えないで下さいね」

冬馬の号令で各軍は配置に移動した。

北と南で、S軍とF軍がそれぞれの配置につく。

戦闘開始までの時間S軍の隊長は会議に集まった。

「今回もF軍の指示は大和君が出しているようです」

「まあ、当然だろ」

百代は頷く。

小雪はみんなにお茶を配っている。

「お茶だよ」

「かたじけなく候」

「我はアールグレイを所望するぞユキ」

「そんなものないよー、だからお茶でがまん、がまん☆」

「これっ、我に無理矢理飲ませるなど……ゴクリ」

「フハハハハ！ 冷えていて実に美味しいではないか!!」

「でしょー（↑ご満足）」

「おい英雄、いい加減にしねえと俺キレるぞ？」

「太陽光を頭に溜めて味方を焼き殺すって」

「仕方あるまい。ではビシッとシメるか」

「ヒーローである我が問おう」

「誰がこの戦に勝利する」

「S軍！」

「誰より優れているクラス」

「S軍ですね」

「兵衆 孰れか強き」

「Sじゃ。質が違うわ！」

「ふふ、負ける要素が無いではないか」

「しかしその慢心で前回は負けましたよ」

「王たるものの二度の失敗などせぬは!!」

「では我が唯一の友トーマ! 戦場の地図を!」

「私の密偵の情報を纏めると、この様になっていますね」

「なんと! 我が正面に一子殿がいるではないか!」

「これはもう運命だな、こうしてはいられん!!」

そう言い英雄は雄たけびを上げてどこかに行ってしまった。

「英雄! ……仕方ありません、話を続けます」

「F軍の本隊は約100名。源君が隊長ですね」

冬馬がF軍本隊を指差した。

「源忠勝は思ったより手ごわい。注意すべきだ」

マルギッテが冬馬に言った。

「ええ、そして前回同様に伏兵が潜んでいる可能性があります。準、英雄の代わりに頭に入れておいて下さい」

「わかったよ、若」

「そして東側の山も奪ってくるでしょう。ですので山を渡すわけに

はいきません」

「なので頑張ってくださいね、突撃隊」

冬馬は突撃隊に言った。

冬馬ファンの女子は全員頷いた。

「モモ先輩が先陣にいればいいんですが……」

冬馬は百代の方を見る。

百代はイスに堂々と座っていた。

隣ではまゆっちが小さくなっている。

「私とまゆっちは動きたい時に動く。そう言うことで仲間になったはずだが？」

「そうでしたね」

「さあ、大和をいたぶるのもいいが……。セリカともう一度戦ってみたいな」

百代は開戦のときを静かに待った。

「これがスパイ達から届いたデータをまとめた布陣図だ」

スグルがパソコンにS軍の配置をアップした。

「うわー、また総大将は正面の先鋒だよ」

モロが総大将の位置を見て言った。

「いいじゃねえか。九鬼のヤツ、カッコいいぜ」

キャップは九鬼の行動に賛美した。

先陣であるF軍本隊、副官の一子と隣にいるリタも燃えていた。

「4人とも先鋒頑張ってくれ」

大和は源に言う。

「上等じゃねえか。やってやるよ」

「……じょーとー……」

源とナベリウスは気合十分だった。

「数はい100人でぶつかってもらおう」

「……300人の敵を100人か」

「あとの100人は伏兵で使用するから」

「だが前回と同じじゃ読まれているんじゃないか？」

スグルは大和に作戦の欠点を指摘した。
しかし大和は首を振る。

「大丈夫、作戦の想定内さ」

「西側が手薄ではないか？」

クリスが布陣を見て言う。
確かに味方の兵数が少なかった。

「不死川はもったいぶって動かないはずだ」

「そうか。では東側が激戦だな」

「後は、モモ先輩とまゆっちだが」

「明らかに動く気がないね。静観してると思う」

「まあ、来ないほうがこっちとしてはありがたいけどね」

モロが笑いながら言った。

そしてスグルが大和に言う。

「おい大和、向こうの助っ人なんだがやはり九鬼のメイドが来るのか？」

スグルの言う通り、敵は助っ人で九鬼従者部隊を投入しているはずだ。

しかし大和はそれに関しても策をとっていた。

「そっちも対策はとってある」

大和はスグルに言う。

そしてセリカたちのもとに行く。

「セリカ、姉さんが来たら総大将を守ってくれ」

大和はセリカに百代の進撃の阻止を頼んだ。

「いいだろう」

セリカも大和の指示に従った。

「あとあの件は大丈夫？」

「心配するな。アイツは戦いが始まるのを待っている」

「わかった。じゃあ任せるよ」

そう言い大和は会議の中に戻っていった。

「では軍師さん、シメの一言を」

戻ってきた大和に甘粕は大和に言った。

「またですか……」

「そうです」

「ハア……」

大和はため息を吐き、一呼吸して、

「みんなS軍を徹底的にやっつけようぜ!!」

大和の号令が大きく響く。

そして周りの皆も拳を天に突き上げた。

「開戦3分前!!!」

鉄心の怒号が山を包む。

「よいか! 開戦する前に、全軍全てが境界線の中に入ってはいけないぞい! 戦場エリアでの遅刻は許さん」

「相変わらずだな」

大和は定位置に着いた。

2-F軍 総大将本陣。約40人。

「始まる系じゃね?」

「そうね」

小笠原と羽黒は開戦まで話していた。

セリカは静かにイスに座っていたが甘粕がセリカに近づいた。

「セリカちゃん、どうか怪我はしないでくださいね」

「……善処しよう」

セリカはそう答えた。

「10！」

「あ、秒読みですね」

「9！」

「敵さん、殺気が溢れてるな」

準がF軍本陣を見て言った。

しかし隣にいる英雄は耳に入っていなかった。

「一子殿が、あの中に……」

「総大将頼むぜ。ビシッとしてくれ」

「分かっている！　だが今回のも運命を感じるのだ」

「あゝ……そうか」

準はもう投げやりな状態だった。

「8！」

「全員、戦闘準備！」

クリスの号令でクリスの率いる部隊は武器を構える。

「7！」

「6！」

「また九鬼の野郎、こっち見てやがるな」

戦線の先頭にいるF軍本陣にいる源は一子に言うが、

「…………ふうー」

一子は全身に闘気を集中させている。

隣にいるリタも槍の手入れをしていた。

「もう集中してるか…………こっちもがんばるか」

源さんはナベリウスに言った。

ナベリウスは指を曲げて肯定した。

「5！」

「それではセリカ様、私は大和さんと行動を一緒にします」

セリカに一礼してエクリアは大和たちの部隊へ向かった

「4！」

「川神大戦の始まりですねユキ」

戦線より後ろに待機している冬馬は小雪に言った。

「でもトーマなんだか楽しそう」

「そうですね、また大和君と勝負できるのですから」

「3！」

「ん？」

「？」

開戦を待っている百代と隣に座っているまゆっちが何かを感じた。

「なんだこれは」

「2！」

「————！」

「これはっ！」

F軍総大将がいる方角から1つの巨大なプレッシャー。
百代とまゆっちがその方角を見る。

否、S軍でそのプレッシャーを感じたのは3人。
いや、4……。

「1！」

「セリカのか？」

総大将の護衛にセリカがいるのでセリカが放った気とも思えた百代だった。

そんなことを考えた百代だが特に気にしなかった。

「0！ 川神大戦！ 開・戦！！！」

鉄心の開戦の怒号が山に響き渡った。

「行くわよ、リタ！！！」

「ええ、ワン子ちゃん」

一子とリタが同時に突撃する。

「F軍本隊、一子に続け！！！！！！！」

隊長の源の号令でF軍は突撃する。
一方のS軍も

「フハハハ！ 行け我がS軍よ！」

英雄の号令で同じく突進する。

一子とリタに2人の敵が突進してきた。

しかし一子は薙刀、リタは槍で相手の間合いの外から横に振り上げた。

突進してきた敵は同時に左右に吹っ飛ばされてそのまま倒れこんだ。

「一番手柄、川神院、川神一子と！！！」

「同じく一番手柄、リタ・セミフ！！！」

2人の声が戦場に響き渡った。

そして2人はそのまま敵の群れの中に突っ込んだ。

圧倒的な突破力で敵兵を吹き飛ばしていく。

「F軍突撃部隊！ 乱れた所に向かってぶつかれ！」

源の指示にF軍は攻撃を仕掛ける。

「おいおい、敵さん勇ましいなマジで！」

「一子殿。さすが我が惚れた方だ！ とても輝いて見えるぞ！！！」

対照的な英雄と準がそれぞれの感想を言った。

「総大将、味方が浮き足立ってる。指示を」

「うろたえるな！ 数ではこちらが有利！ 圧倒的な数で殲滅しろ！！！」

300 対 100の戦いが始まった。

（東山争奪戦）

F軍の山賊隊・改が果敢に敵へ攻め込む。

「今回も全員、皆殺しだ!!」

「フフ……さあ暴れようか」

山賊隊・改の目の前には

「今度こそモモ先輩のために!!」

「」「モモ先輩のために!!」

「トーマ君は私のものよおお!!」

「私のものよ!!」

百代と冬馬のファン部隊50人が半狂乱で向かってきた。
両者共々、敵を多数で倒していた。

山賊部隊が不利な状況で頼りになる男が現れた。

「風神隊、推参!!」

「俺様も到着!!」

キャンプが率いる精鋭達が、敵部隊の横っ腹に突撃して殲滅していく。

「生き残った敵にトドメをさせ！」

大和は率いる参謀部隊の戦闘員に指示する。

大和の部隊にいたエクリアも戦闘に参加していた。刃を潰してある得意の連接剣で敵を倒していく。

「エクリアさんってすごく強いね」

遠くから見ていたモロは大和に言った。

「ああ、予想以上の強さだな」

山頂の敵を一掃したキャンプが大和に近づく。

「大和、次に俺達は九鬼本隊だな？」

「ああ、その後は自由に動いてくれ」

「おし！俺達は源忠勝隊の援護にいくぞ」

キャンプは部隊に言い、風のように行ってしまった。

「山頂を制圧するには下にいる1年部隊を片付けるか」

山頂に登ろうしている敵の部隊を見て大和は山賊部隊に指示を出す。半数減った山賊部隊だがより殺気立っており突撃していった。

「ヨンパチ、クマちゃんの様子はどうか？」

「もうちょっとだ。もうちょっと待ってくれ」

「才腹ガ…へっタ」

絶食しているクマちゃんは震えている。

そして大和は中央戦線を見た。

「ゲンさん、頼むぜ」

中央戦線。英雄隊 対 忠勝隊

「はあああーっ！！！！」

薙刀を振り回し、一子は舞っていた。

「ちえすとおー！」

敵兵が正拳を一子に放つが、

「あまいっ！！！」

拳を防ぎ、柄で相手を吹き飛ばす。

もう既に、2、30人は倒しているはずだ。

一子の周りには敵しかいなかった。

「よし囲んだ。さすまた部隊！ 捕獲だ！！」

一斉にさすまたが伸びてきた。

一子は薙刀を回転させ払うが死角からさすまたが伸びる。

「！ しまったっ……」

だが、そのさすまたは槍でへし折られた。

「リタ！」

一子の前にリタが降り立つ。

源も一子の方を見た。

敵に囲まれており脱出が出来ないようだった。

「一子っ！！」

源は一子に呼びかけるがそれが隙となってしまうた。

源の後方から敵が攻撃を仕掛ける。

「しまった！！」

源はガードしたが勢いに負け、地面に転がる。

「源！！ 覚悟！！」

トドメを刺すべく追撃をかけた敵は横から来た攻撃に吹き飛ばされ

た。

源が攻撃の方を見るとナベリウスがいた。手のひらから魔弾を出し、源に襲い掛かる敵を排除していった。

「……………ぶい……………」

源にピースをしていた。

源はそれを見て笑った。

「まさか子供に助けられるとはな……………情けねえ」

源は周りの状況を確認した。

味方はかなりやられており不利な状態だった。

「このままじゃ全滅だな……………全軍撤退だ！！」

源の号令でF軍は撤退を始めた。

「ワン子ちゃん、源さんから撤退命令よ」

源の号令が聞こえたりタは一子に言った。

「え、まだ戦えるわ」

「でも多くの味方がやられたわ。このままじゃ全滅する」

会話を聞いた準は、

「撤退する気だ、逃がすな！ 2人ともここで倒せ！」

準を号令で退路を塞ぐ。

だが突如2人の前の敵が吹っ飛んだ。

周りの敵も状況が理解できず混乱していた。

リタと一子が攻撃した方向を見ると、

「……リタ……」

魔弾を放ったナベリウスが手招きしていた。

「ナイスよナベリウス、ワン子ちゃん今のうちに」

「あの子すごいわね……」

道が開いたほうに2人は脱出した。

「っておい、簡単に突破されてんじゃねーよ」

「一子殿……」

「しっかりしろ総大将!!」

——東山山頂、F軍参謀本部——

「よし源忠勝隊が退却をはじめた」

さすがゲンさんだと大和は思った。

「これはまた追撃を開始するかな？ 敵は」

——英雄隊

「若から連絡だ！ 絶対追撃するなだよ」

「あまい、あまいぞっ！！ 追撃するに決まっているだろう！！！！」

「だから！ 罠に決まってんだろ」

準は英雄の言葉に呆れる。

しかし英雄は止まらない。

「罠程度で我が隊は怯まん！ 全軍我に続け！」

「……なんかデジャヴを感じるぜ」

英雄を無鉄砲さに準は凹んでいた。

——東山山頂、F軍参謀本部

「相手の総大将はアホなのか？」

追撃を始めたS軍を見てスグルは言った。

「予想通りだな。モロ、花火の準備を」

「わかった」

モロは花火の準備を始めた。

「不死川軍、動きナシ」

スグルが無線で大和に情報を伝える。

「ゲんさんの部隊はいい位置に行ったな。モロ……！」

大和の合図で空に花火が上がった。

「この合図は」

花火の音を聞いた準は空を見上げた。

「伝令っ、森から伏兵です」

「やはり伏兵か」

「何人来た？」

英雄は聞いた。

「10名程度かと」

「フハハハハ！ 物の数ではないか！」

英雄は少ないと笑う。
しかし……

「伝令！　今度は逆方向から伏兵！　10名程度です」

「羽虫だな、側面の兵で対応しろ」

「伝令っ、またも森から伏兵、10名！」

「蹴散らせ蹴散らせ！」

「逆方向から伏兵、10名！」

F軍の伏兵が次々と出現する。

「ええい！　鬱陶しい」

さすがの英雄もしびれをきらす。

「退却中止！　転進！　ぶつかるぞ！」

「了解——！！！」

殿にいた一子は反転して、特攻する。

先頭を走っていたS軍の敵が一子に襲いかかるが

「隙がありすぎよ——！」

それを一子は一撃で叩き潰した。

「お、敵さん逃げるのをやめたか！」

「構わん。このまま飲み込むのだ！」

英雄が指揮を執るが、

「さらに伏兵ーッ！」

「伏兵の出現が止まりません!!」

「ちい、奴等め何部隊潜ませているのだ」

英雄は軽く舌打ちする。

「このままじゃ士気に影響がでるぞ」

「分かっている。落ち着きを失っては勝利は掴めんからな」

「さすが俺達の総大将……!!」

その時、準は森から凄まじい圧力を受けた。
森から出てきたのは……

「クリスティアーネ・フリードリヒ推参！」

ヴァルキリー隊を率いるクリスだった。

「敵部隊を、刺し穿つ!!」

部隊に触れた兵が、ことごとく跳ね飛ばされていく。

今までの兵とはレベルが違っていた。

「またあの金髪の部隊か」

準はクリスの部隊を警戒した。

クリスの部隊は反転してまた突っ込む。

クリスは英雄を見つけるとレイピアを構え走った。

「覚悟っ！！」

クリスがレイピアを伸ばすが、

「お嬢様、先走りましたね」

クリスの攻撃がトンファーによって弾かれる。

攻撃を止めたのはマルギッテだった。

「なっ！！ マルさん」

「勝負はこれからですよ、お嬢様。獵犬部隊！ 伏兵を殲滅しなさい」

マルギッテの声でマルギッテ率いる精鋭部隊がF軍の伏兵を囲むように出現した。

突然の新手にF軍で動揺が起きる。

「マルギッテ、なぜ貴様が？」

英雄がマルギッテに言う。

「葵からの要請です。伏兵が潜まっている可能性があるので機を見て奇襲をしろと」

マルギッテは振り返らず言った。

「さすが我が唯一の友、トーマよ!!!」

英雄は高らかに友を賛美する。

F軍の伏兵は瞬く間にやられていく。

「あなた達は一時退却しなさい」

「悪いがそうさせてもらうぜ」

そう言い準は英雄を連れて戦場から退却し始める。

「まてっ!!」

クリスが追撃しようとするがマルギッテが前に立ち塞がる。
トンファーを構え闘気を放出した。

「この私を倒してからじゃないと無理ですよ、お嬢様」

マルギッテがクリスに言った。

「敵に構うな、退け!」

英雄の指示でS軍は撤退を始める。

「すぐに体制を立て直——」

そこに英雄目指して、1つの部隊が現れた。

「風神隊、見参!! 行つくぜーっ!!!!!!」

キャップ率いる部隊が退却していたS軍を崩していく。

「また貴様か……風間 ああああ!!!!!!」

英雄はキャップの襲来で大きく吼えた。

「F軍の精鋭部隊がこんな状況で追撃——! なんて奴等だ」

準は風間の出現で焦りを感じる。

「敵将の首が取れるぜ——!!!!!!」

ガクトが敵にラリアットを与え吹き飛ばす。

準は英雄に言った。

「英雄逃げろ! ここは書道3級の俺にまかせろ!」

「準?」

「親衛隊で時間を稼ぐ。お前は後方へ退却しろ!」

準の言葉に英雄は頷く。

そして言った。

「——大儀であった、ロリコン犯罪者」

「それが人に対する感謝の言葉かテメエ！」

英雄は数人盾役とその場を離脱した。

「…まったく、とんでもない君主を持つと苦労するぜ」

親衛隊が、風神隊の行方を阻む。

だが勢いに乗っている風間達に呆気なく倒されていく。

「ここからは一步も行かせん……」

「逆にお前達を倒そうと思っている」

準は構えて気を開放する。

そこにガクトが突っ込む。

「前回俺様にやられた奴が何言ってやがる！　またぶっ飛ばしてやるぜ」

ガクトの攻撃を読んで、反撃の構えを取る。

その直後、準は背後からの殺気を感じた。

背後からは、準の脳天目指して矢が飛んできていた。

しかし準は振り返らずに頭を動かして矢を避けた。

「まだまだー！　ハンサムラリアーッ！……」

ガクトの腕が準に迫るがそれも回避した。

ガクトは振り返り驚いたが、森の奥から狙撃した京はもっと驚いた。準は首を回しながらガクトに言った。

「前回のようにはいかないぜ。狙撃の予想も当たってよかったよかった」

笑顔で笑っていたが、一瞬で顔つきが変わる。
鬼の形相なような顔でガクトを見る。

「お前を倒せば風間の隊の戦力が落ちるだろうな」

そう言い準はガクトとの一定の距離を保つ。

短い時間だが両者には長い時間を感じられた。

ところが鬼の形相だった準の顔が変わり、目線がガクトから外れた。
ガクトもおそろおそろ視線の方を見た。

その先にはナベリウスが準に向かって歩いている光景だった。
そして準の前で止まる。

準の顔は場に相応しくない穏やかな顔をしていた。

「なにかようかな？ お嬢さん」

警戒をとらない準はナベリウスに言った。

ナベリウスは準を見上げてたった一言――

「……………わるいの……………めー……………」

と言った。

その言葉に準は骨抜き状態になった。

準は目線を合わせて言った。

「お兄さんはもう悪いことはしないよ」

準はニコニコしながら言った。

その光景にガクトと京、周りにいる全員が呆然とした。
するとナベリウスが準に向かって手のひらを向ける。

「どうしたの？ 手でも怪我したか？」

準は手を見るが見た感じ怪我はしてなかった。
するとナベリウスはポツリと言った。

「……ばいばい……」

「え？」

返事の意味が分からなかった準は聞きただそうとしたが無理だった。
ナベリウスの手から放たれた魔弾が準の鳩尾に直撃する。

「ウブルォアアアアア！！！！！！」

準は防御も出来ず、30メートルほど飛んでいった。

準は意識が微かに残っている状態でナベリウスがいる所を見た。

そこにはリタとナベリウスはハイタッチしている光景が見えた。

その光景で自分のはめられたと気づいた。

そしてナベリウスは準の方を見て言った。

「……たましいは……はこんであげる……」

物騒なことを言っているナベリウスだったが、遠くにいる準には聞こえるはずもなかった。

「まさか……若い女の子にやられるとはな……」

「だが……俺の人生に悔い無しだった……ぜ……」

そう言い準の意識はそこで途絶えた。
しかし準の顔は嬉しそうな顔だった。

第11話 川神大戦 (1) (後書き)

まじこいの男性キャラは井上準が好きですね。
キャラ的にウケルので結構お気に入りですね (声優も合ってるし)
皆さんは男性キャラでしたら誰がいいですか？

第12話 川神大戦 (2) (前書き)

誤字脱字がありましたらすいません。
第2部ですどうぞ

第12話 川神大戦（2）

英雄が撤退するまでの間に、準率いる親衛隊は風間の風神隊によって殲滅させられていた。
そしてもう一方、

「そろそろですか……」

クリスの追撃を阻止していたマルギッテが周りの状況を見て言った。
マルギッテの率いる獵犬部隊はF軍の伏兵をほとんど片付け本陣と交戦していた。

「獵犬部隊、方円を組みつつさがる」

マルギッテの指示で部隊は戦闘を止め撤退していく。
マルギッテも英雄と合流しようとする。
しかしクリスは撤退を阻もうとした。

「逃げる気かマルさん!!」

真剣な眼差しでクリスはマルギッテを見る。
しかしマルギッテはクリスに言った。

「まだお嬢様と戦うには早すぎます。決戦に相応しい場所で戦いたいのです」

そう言い素早くクリスの包囲網を抜け出した。

「決戦の地で会いましょう、お嬢様。次は手加減はしません」

そう言い残しマルギッテは戦場を後にした。
マルギッテは撤退する英雄に追いついた。

「——お、マルギッテ。戦線から離脱してきたか」

「猟犬部隊、総大将の護衛につきます。どうにか逃げ延びましたね」

「親衛隊のおかげだ」

「部隊を立て直し、再戦を臨みなさい」

「無論よ!!」

英雄はそう言い後方へ退却した。

S軍、井上準および親衛隊——全滅。

英雄隊——伏兵の出現により手痛い打撃を受けたが壊滅は防ぐ。

F軍忠勝隊——マルギッテの部隊により伏兵部隊が壊滅状態。されど戦意は上昇。

戦いは第2局面に移行していた。

——東山山頂、F軍参謀本部。

まだ山のふもとで敵の戦闘は続けられていた。

「ふもとで戦ってる不良達、もうダメそうだな」

ふもとの戦闘をみたスグルは言った。

たしかに不良達は体力が尽き攻撃に切れ味が無くなってきた。

「わー！ 敵が登ってきたよ」

モロが敵の襲撃に慌てる。

その時コンパチとクマちゃんがきた。

「大和、クマちゃん仕上がったぜ」

「おなかへったよおおおおお！！！！！！」

クマちゃん含む川神学園の巨漢たちが頂上に集結した。

「皆、今回も横一列で山を駆け下りてくれ」

巨漢たちが一斉に声を上げて山を駆け下りていった。

登ってきた敵は次々と跳ね飛ばされていったが、大和はそれを見ておかしいと思った。

「おかしい、数が少なすぎる」

大和がそう思っていると、

「大和！ ふもとに敵兵が出現したぞ！」

「なに！」

スグルの情報に大和はふもとを見た。
そこには隠れていたと思われる敵兵が集結していた。

——S軍参謀本部

「大和君、また庄殺部隊ですか……同じ手など戦略が浅いですよ」
報告を受けた冬馬は薄笑いを浮かべていた。

——F軍参謀本部

「戦闘部隊、なんとか敵の侵略を阻止してくれ」

大和は指示を出す但兵力の差があった。
いずれにせよ侵略されるのは目に見えていた。

「大和、私も加勢するぞ」

クッキーも戦闘に行こうとした時、エクリアがクッキーを止めた。

「ちょっといいですか、クッキーさん？」

「なんだ、お前は……たしかエクリアだったな？」

クッキーはエクリアを見て言った。

「はい、クッキーさん。私の攻撃が完成するまでの間、時間稼ぎをしてくれませんか？」

エクリアはクッキーに言う。

「時間稼ぎだと？ あそこにいる敵をお前は倒せるのか？」

クッキーの言葉にエクリアは頷いた。

クッキーはエクリアの目を見て言った。

「いいだろう、お前の力見せてもらおう！」

そう言いクッキーはエクリアの攻撃時間を稼ぐために戦線に行った。もう味方もやられており戦況は不利な状態だった。

クッキーに敵兵が襲いかかるが、

「これでもくらえっ、クッキーダイナミック！」

クッキーの奥義で一撃で沈められた。

敵兵はクッキーと一定の距離を空けて睨み合っている。そこに大和の声が響いた。

「クッキーー！！もう大丈夫だ、戻って来い！」

「了解した」

クッキーは頂上に撤退すると敵兵も続いて上ってきた。クッキーは頂上で待つエクリアとすれ違い言った。

「さあ、見せて見るがいい!!」

エクリアは頷き詠唱を始めた。

「聖なる光よ 我が手に集い来たれ 目の前に敵に裁きの光よ!」

エクリアが両手を前に出すと、前方に魔方陣が展開した。

「純粹魔術・イオールーン!!」

敵はエクリアの放った光に呑み込まれた。

目を開けて大和が見たものは敵が全員気絶している光景だった。
クッキーはエクリアに近づいた。

「中々やるじゃないか」

クッキーの言葉にエクリアは笑っていた。

——S軍参謀本部

「東山の部隊が全滅——ですか？」

報告を受けた冬馬は驚いた。

圧殺部隊の攻撃を受けていない部隊がやられるのは予想外のことだったからだ。

「どのように撃破されたんですか? …ふむ」

詳しい情報を聞いた冬馬は微笑した。
それを見た小雪が冬馬に言う。

「どうかしたトーマ？」

「いえユキ、予想外のことのできたので笑ってしまったんですよ。
それよりユキ、私達も出撃しますよ」

「おっ！ ついにきたのだー！！」

そう言いS軍参謀本部は行動を始めた。

——F軍忠勝隊

「埋伏していたやつらが殆どやられて、動けるのはだいたい80名
くらいか……厳しいな」

兵の数を見て源は言った。
そこに斥候が戻ってきた。

「伝令！ 隊長オ！ 九鬼本隊はなおも後退中、部隊の立て直しを
しているようです」

「よし、俺の部隊は前進。戦線を押し上げていくぞ」

「待ってました！ 早く行きましょ」

一子が飛び起きて元気に駆けていった。

その後をリタたちもついていく。

「ワン子ー！ 無茶はすんなよー！」

「やれんなよー！」

キャップとガクトの言葉に一子は手を振って答えた。
源の行こうとしたがキャップの方を振り返った。

「お前たちは独自行動か？」

「ああ、少し休憩したら出発する」

「そうか。やれんなよ」

「タツちゃんもな」

「うるせ」

そう言い源は一子を追いかけた。

「で？ この後はどうするんだキャップ」

ガクトがキャップにこの後の行動を聞いた。
キャップは地図を出して川辺を指を刺した。

「前回のよう川を下って奇襲されないようにしないとな」

「水泳部の連中か」

「ああ、休憩終わったら一気に駆けるからな」

「分かってるぜ」

キャンプ率いる風神隊は川辺に行くことになった。

——F軍参謀本部

「伝令、S軍参謀本部が移動を開始」

「葵冬馬が動いたか……なにかやってくるな」

大和は地図を見ながら呟いた。

「伝令、源本隊、敵弓兵部隊の牽制で前に進めず」

大和は京に電話で応援に行かせた。

「で、どうなってるのこれ？」

電話を受けた京が本隊に合流した時には、敵弓兵部隊は壊滅されていた。

「実は全部こいつがやっちゃったんだよ」

源がナベリウスを指差して事情を説明した。
ナベリウスが遠距離から来る矢を魔弾で叩き落して敵弓兵を同じく
魔弾で攻撃したのだ。
そのことを聞いた京は座り込んだ。

「大和との約束が……」

大和の約束が果たせなかった京はものすごく落ち込んでいた。

S軍不死川軍――

「外での読書もいいものじゃ」

不死川はイスに座り本を読んでいた。

「伝令、葵君より出陣要請です」

「ほほほ。苦戦しているようなのじゃ」

「此方が戦場を麗しき光で活気づけるのじゃ」

「目の前にいる部隊への指示はどうしますか？」

「特にないのじゃ。守らせておれ」

不死川が自分の兵に言った。

そして敵本陣の方角を見た。

「川神め、覚悟しておれ！」

そう言い不死川軍はF軍本陣へ進行を開始した。

——F軍参謀本部

「やばいぞ大和！ 不死川軍100名が源本隊に進行し始めた」

「なに！！」

大和が不死川軍の方を見ると確かに源本隊に向かっていた。

大和は駐留している部隊に応援を要請しろとスグルに言った。
だが、

「大和……待機していた部隊から応答がない」

「まさか寝返ったのか？」

大和はスグルに聞いたが返答はなかった。

「ヨンパチ、様子を見に行ってくれ」

「分かったぜ」

そう言いヨンパチは山を駆け下りていった。

「さらに伝令。中央戦線で後方に下がっていた九鬼隊、マルギツテ隊が前進。150名以上」

「早いな……このままじゃ本隊がやられる。参謀本部も中央戦線に移動する準備をしとけ」

大和は移動の準備を指示する。

「ワン子たちは大丈夫かな？」

圧倒的な兵力差で負けている本隊をモロは心配していた。

「多分大丈夫のはずだ。だが嫌な予感がするぜ」

——中央戦線

こちらでは九鬼とマルギツテの部隊と源の部隊が激しい戦いを繰り広げていた。

「やああ——っ!!」

「はああ——っ!!」

リタと一子の叫び声上がる。

2人は背を合わせて敵を倒していた。

もはや、相手は2人を止める術が無いのだと腰が引けていた。忠勝は、2人をフォローしつつ敵を倒していく。

「あの2人、中々やるではないか」

「そうですね、隙が見当たりませんね」

遠くで一子たちの戦いを見ている英雄とマルギッテは言った。

「マルギッテよ、横の備えが厚いのはやはり風間の対策か？」

「ええ、あの部隊は予測が出来ないので」

2人が話している間にF軍が少しずつだが勢いを増してきた。

「敵の勢いが弱くなってきたぞ突っ込め！」

「負けるな！ こちらも押し返せ！！」

両者の部隊が交戦しているとS軍の斜め後方から

「ほほほ。不死川軍、華麗に参上なのじゃ」

不死川筆頭に100名の部隊が合流してきた。

「やっと来たか。遅いぞ不死川！！！」

襲い到着に英雄が不死川に喝を入れる。

「黙るのじゃ!! 来てやっただけでも感謝するのじゃ!!」

不死川が英雄に文句を言っていると不死川は誰かに名前呼ばれた。呼ばれたほうを見るとそこには一子が立っていた。

「アンタ! 私と一騎打ちを所望するわっ!」

その言葉に不死川は高らかに笑った。

「山猿ごときが高貴なる此方に勝てるわけ無かろう」

そう言う不死川に一子は負けずと言い返した。

「まさか、私に負けるのが怖いのね?」

その言葉に不死川の顔から笑顔が消えた。そしてその目には敵意が込められていた。

「おぬし……あまり調子に乗るでないわっ!!」

不死川は吠え、懷から鉄扇子を出す。
一子もまた薙刀を構えた。

「いざ」

「尋常に」

「勝負よ（なのじゃ）!!!!!!」

2人は同時にぶつかった。

それを見ていた英雄は大きく笑う。

「まさに川神大戦に相応しい戦況であるな！」

——F軍参謀本部

「中央戦線、激戦らしいぞ」

連絡を聞いたスグルが大和に報告する。

「残留部隊を見に行った人から報告が来たよ！」

「どうだった？」

大和はモロに現状の報告を聞く。
しかし内容は「全滅」だった。

「70名くらいいたはずだぞ！？」

「それでも報告では全滅だって言ってたよ」

「九鬼従者部隊のしわざか？」

スグルの言葉に大和は考えた。
だとすれば総大将に向かうはず……
大和はすぐに本陣に電話で連絡した。

——S軍参謀本部

「敵70名を全滅させてアップは終わったって」

連絡をうけた小雪が冬馬に言った。

「ありがとうユキ。風間君にまた水泳部の奇襲を阻止されたので、まあこれでいいでしょう」

「あの2人の部隊は本陣からは遠い位置にいるよ」

「では彼女達に連絡をしましょうか」

そう言い冬馬は携帯で部隊に連絡をした。

——F軍 本陣 甘粕真与隊付近

ヨンパチが本陣に移動していると目の前に1人の女性が倒れていた。通り過ぎようとしたが不意に足を止めた。

ヨンパチは女性に近づき拾った棒で突いてみる。

しかし反応は無かった。

するとなぜかカメラを持って撮影しようとしていた。

「魍魎の宴で高く売れるぜ」

そう言って撮影する瞬間、

「バカかオメエ」

「な!？」

後ろを見ようとしたヨンパチの股間に鋭い蹴りが当たった。

「ウギヤアアアアアア!!!!!!!!!!!」

ヨンパチは絶叫と共に崩れ落ちた。

蹴りをかましたあずみは携帯に連絡が入った。

着信の相手は冬馬からだ。

『準備はよろしいですか?』

「いつでも戦闘ができるぜ」

あずみの周りには30人の九鬼従者部隊がいた。

あずみと同じく、全員メイド服を身に包んでいる。

『ではお願いします』

「了解だ」

あずみは通話を切った。

そして腰に携えていた小太刀を構えた。

「殺戮部隊、敵本陣に奇襲をかける」

あずみの号令で全員が一斉に抜刀した。
そしてF軍本陣への奇襲を開始した。

——東山山頂、F軍参謀本部

「大和！ 本陣近くで九鬼従者部隊が出現したって報告が！」

「やはりか……」

モロの報告で大和はため息をした。

「ため息なんてしている暇があるのか大和！？」

スグルが大和に言う。

大和は2人に言った。

「大丈夫だ。本陣にいるセリカに連絡を入れといた」

「でも相手が分散したらいくらセリカでも間に合わないよ」

モロが言うが大和は首を振った。

「大丈夫、もう1人助っ人がある」

その顔は自信ありげの表情だった。

——F軍 本陣 甘粕真与隊

「容赦なく進め！」

あずみの命令で、24人のメイドが斬り進む。

大将を護衛するF軍の兵士は紙のように斬られていく。

さすがに九鬼家が誇る特殊部隊には生徒は勝ち目がなかった。

そして大将である甘粕のところに辿り着いた。

そばには小笠原や羽黒などの非戦闘員が固まっていた。

普通なら速攻で斬り込む所だがそれが出来なかった。

甘粕の前にセリカさえいなければ。

「……ちっ」

あずみは舌打ちをする。

対峙しているセリカの間を窺おうするがその隙がまったく見当たらない。

他のメイドも同じく攻撃を出せずにいた。

すると後ろの垂れ幕から誰かが出てきた。

その人物はセリカに近づき耳打ちをした。

「……わかった」

そう言うその後ろに下がり甘粕の隣に座りこんだ。

そして出てきた人物があずみ達に指を曲げて挑発した。

流石のあずみも今のでしびれをきらし全員に号令をかける。

「全員！ フォーメーションD！！」

その号令で出てきた人物に向けて複数の矢が飛んできた。

どれも当たれば神経毒が塗っており掠りでもすれば毒が回って動けなくなる。

しかしその人物は笑っていた。

そして握っていた剣を振る。

すると剣の風圧で飛んできた矢を吹き飛ばした。

さらに飛んできた方向に魔弾を飛ばす。

後方で微かだが爆音を叫び声が聞こえた。

「やりすぎじゃないか？」

セリカの言葉に振り返り、大きく笑っていた。

隙を見てメイドが一斉に襲いかかった。

しかしあずみだけは後ろに跳んだ。

跳びかかったメイドたちは素早い一閃を喰らい、所々に飛ばされていった。

「おまえ……一体何者だ！！」

あずみは正体を聞かすがその者は答えずに斬りかかった。

「くっ！！」

小太刀2本で剣をガードしたが、なんと小太刀が力負けして折れて

しまった。

あずみが間一髪で避けるが剣先が掠めた。

「ぐっ!？」

掠めた場所に激痛を感じ、あずみは確認すると鎖帷子が服の中で粉々に砕けていた。

得体の知れない敵はなおもあずみとの間合いを詰めようとしてきた。

「2度の失敗……糞が!!!」

あずみは手榴弾を地面に叩きつける。

派手に爆発し、煙が晴れるとそこには誰もいなかった。

「逃げた……んですかね？」

甘粕は隣にいたセリカに聞いてみた。

「ああ、相手は手傷を負った。戦いには復帰は出来ないだろう」

セリカは立ち上がり周りを見る。

F軍の戦闘兵は全滅させられていた。

残っているのは女子だけだった。

——東山山頂、F軍参謀本部

総大将の無事を大和は携帯を通して確認できた。

「どうにか敵の奇襲を防げたらしい」

その報告に全員は胸をなでおろした。

「中央戦線はどうなってる？」

大和はスグルに状況を聞いた。

情報では本陣が劣勢であるとの報告だった。

「風神隊とヴァルキリー隊に援護に行けと伝えてくれ。俺達参謀本部も戦線に行くぞ」

「了解だ」

参謀本部にいる兵士が中央戦線に移動する。

大和は山頂に駐留する僧兵隊に言った。

「では姉さんが来た際には合図を出すのでよろしくお願いします」

僧兵隊のリーダーが大和の言葉に頷いた。

そして大和も中央戦線に移動した。

——中央戦線。源隊 対 マル&不死川&九鬼隊

「数では我が隊が有利だ！ 1人の敵を多数で仕留めよ！」

九鬼の指示でS軍の動きに精妙になってきた。

「くそっ！　どきやがれ！！」

「お前の好きな様にはさせん！」

源はマルギッテの攻撃を辛うじて避けている。
そのおかげでまともな指示が出せずにいた。

「はああ！！」

「庶民ごときが！！」

不死川と一子は共に一騎打ちで闘っていた。
一子は掴まれないように、不死川は鉄扇子で薙刀を受け流し懷に潜り込もうとしていた。

「高貴なる絡め技じゃ！」

不死川が攻撃に出るが一子は薙刀で間合いを取らせない。

「これで終わらせるわ！」

一子が一気に勝負を仕掛けた。

「川神流・地の剣！」

一子の攻撃で不死川が紙一重で避けるが攻撃は止まらない。

「まだまだっ！ 川神流奥義・大輪花火！！」

一子が力を込めた斬撃を不死川に向かって振り上げる。

「ちょっ……！！」

不死川は咄嗟に扇子でガードするが勢いに負け空中に浮き上がった。

「これで最後っ！ 川神流奥義・風林火山！！」

薙刀を大きく回転させて空中にいる不死川に叩きつけた。

「によわぁー！！！！」

2撃目の攻撃で扇子を破壊された不死川は一子の攻撃をもろに当たって吹っ飛んでいった。

地面に着地した頃には目を回し気絶していた。

「これで友達のは返したわよ！」

薙刀を空に掲げて一子は叫んだ。

そこにマルギッテが接近してくる。

「戦場でのよそ見は致命的だぞ！」

「しまった！」

一子は防御しようとしたがマルギッテの攻撃の方が速い。やられると一子は目を瞑った。

しかし攻撃が来ない。

おそろおそろ目を開けると目の前にはクリスがマルギッテの攻撃を止めていた。

続いてクリスの部隊であるヴァルキリー隊も参戦してきた。

「犬、大丈夫か？」

クリスは一子に怪我がないか聞いた。

「もちろんよ」

一子の返事にクリスは笑った。

「では犬、マルさんの相手を譲ってもらおうぞ！」

そう言いクリスはマルギッテと交戦し始めた。

「マルさん、今度こそ決着のときだ」

「いいでしょうお嬢様。私も全力で行きます！」

そう言い眼帯を取り、クリスとマルギッテの戦いが始まった。

源隊と九鬼隊の戦いでは源隊が数の差で負けていた。
また1人と味方の兵が倒れていく。

「フハハハ!! 一気に叩き潰せ!」

「このままじゃやべえぞ」

源の兵士もあと10人ほどしかない。

一方の九鬼隊はまだ60人ほどいた。

「お前はここまでよくやった。だがこれで終わりだ!!」

九鬼が突撃をかけようとした、F軍をヒーローが現れた。

「風神隊!! ただいま参上——!!」

キャンプ率いる風神隊20人が九鬼隊の側面に突撃してきた。

「お前が来ることは分かっていたぞ、風間!!」

九鬼は的確な指示でキャンプの進行を阻止する。
そこにもう1部隊が姿を現した。

「参謀部隊、九鬼隊に総攻撃だ!」

大和を先頭にF軍の参謀部隊が九鬼隊に向かう。

エクリアが前方の敵を一掃しようと魔弾を放った。

このまま行けば命中するはずだったが空からマガツクッキー3体が
飛んできた。

「マイスターには指一本触れさせん」

「喰らうがいい、我ら三位一体の攻撃!」

「トリニティー・ダイナミック!!!」

3体が自前のサーベルでエクリアの魔弾をことごとく相殺していた。

「クッキー1体を任せるがいいか？」

「了解した。自分との勝負……負けられんな!!!」

中央戦線で全戦力が集結していた。

——S軍、川神百代&黛由紀江

「いい戦況になってきたな、まゆまゆ？」

「しかしこのままでは英雄さんが討たれてしまいますよ?」

「こっちも敵の総大将の所に行くか」

百代は腰を上げた。

まゆっちも同じく立つ。

「ははは！！ 川神百代！！ 出るぞ！！」

「黛由紀江、行きます！！」

2人の強者が遂に動き出した。

——F軍本陣

百代が一番に到着した。

遅れてまゆっちも到着した。

目の前にはセリカが静かに座っていた。

「セリカ、お前とまた戦いに来たぞ！！」

百代の声でセリカは目を開け立ち上がる。

その場だけはまるで別の場所だと感じられた。

「敵将は？」

まゆっちが甘粕を探すが周りにはセリカ以外誰もいなかった。

「あいつらなら逃がした。ここにはいない」

セリカが答える。

「じゃあお前を倒してから総大将を討つ!!」

百代がセリカに言った。

そこに3人以外の声が挟んだ。

「それはさせんぞ」

セリカの後ろの垂れ幕から1人の女性が現れた。

青色の長髪で服は露出度が高い踊り子のような服だった。

しかし女性からは圧倒的な威圧感が漏れていた。

「お前……開幕寸前に感じた気配の持ち主か」

開幕のときに感じた気配と似ていたので百代は女性に言った。

「そうなの、我は譲ちゃんと戦いたい」

そう言い百代を指差した。

百代は驚くがすぐに笑い始めた。

「私と戦いたいか……おもしろい!!」

百代は拳を構える。

「川神流 川神百代!! お前の名前は？」

女性は腰の剣を構え言った。

「我が名はハイシェラ！ 地の魔神ハイシェラよ！！」

そう言い百代とハイシェラはお互いにぶつかった。

第12話 川神大戦 (2) (後書き)

ついにハイシエラ様が登場です。

戦女神ではハイシエラ様が一番のお気に入りです。

カッコイイヒロインっていいですね (笑)

次回はハイシエラ&百代の戦闘、セリカとまゆっちの戦闘がメインになると思います。

書くのに時間がかかるので、気長に更新をお待ち下さい。
ではまた次回お楽しみに

第13話 川神大戦 (3) (前書き)

皆様の方、お久しぶりです。

そうでない方、はじめまして。約一ヶ月ぶりの投稿です。

書くのが面倒になり疎かになっていました

大変お待たせしました。

短いですがご了承ください。

ではどうぞ

第13話 川神大戦 (3)

川神大戦が行われている丹沢では大きな死闘が繰り広げれていた。F軍の本陣付近では爆音や土煙が次々と立ち昇っている。遠くから見ている鉄心は時々飛んで来る気弾を相殺してはその戦いを観戦していた。

「ここにいましたカ」

鉄心の隣に緑のジャージ姿のルー師範代が鉄心の気配を探って飛んできた。

「ルーか、おぬしもモモの戦いの観戦かの？」

鉄心はルーに向かって言う。

「一応は。もしもの時ために来ましタ」

ルーはヤレヤレといった様子でため息をついた。そして百代がいるであろう場所に目を向けた。百代と戦っている人物の気をルーは観察している。

「モモの相手が気になるか？」

ルーの行動を察してか、鉄心がルーに聞いた。

「ええ、いったい誰でしょうか？ これほどの気の持ち主は」

「うむ、セリカは自分の戦友と言っておったぞ」

セリカは実体化したハイシエラを見た。
ハイシエラも自分に起きたことが信じられずに自分の身体を触っていた。

「セリカよ、この者は誰じゃ？」

鉄心がハイシエラを見てセリカに尋ねた。
セリカは自分の剣にハイシエラを封じた事とさっきまでのことを鉄心に話した。

それを聞いた鉄心は割れた瓶の破片を拾いまじまじと見た。

「これは川神神水かわかみしんすいが入っていた瓶じゃな」

鉄心が2人に向かって言った。

「川神神水？ なんじゃそれは」

ハイシエラは鉄心に言う。

「うむ、これは飲んだ者の潜在能力を開放するものじゃ。しかしそれと同時に劇薬でもあるのでこの蔵に置いておったのう」

鉄心がハイシエラに説明する。

「我のようなケースはあったのか？」

「いや、物にかけるなど前例がなかったからの。そこまではワシにもわからん」

ハイシエラは腕を回し状態の確認を行う。

セリカと最後にやり合った紅き月神殿以来なのでぎこちないが数日で感覚は掴めるだろう。

「もう剣には戻れないのか？」

セリカはハイシエラに聞いてみた。

「いや、戻れるぞ。どうやら剣にも実体化することも可能になったようだ」

ハイシエラは笑いながら答えた。

するとハイシエラはあることに気づいた。

「これなら我も川神大戦に出れるのではないか？」

ハイシエラはセリカに言った。

確かに外部からの助っ人で参加することはできる。

しかしそれではハイシエラによる一騎当千になってしまうのではないか？

「大丈夫じゃセリカよ。我は百代の譲ちゃんとしか戦わん」

ハイシエラがセリカに言う。

ハイシエラも百代との戦いたいとうずうずしているようだった。

「ほっほっほ。今回の大戦は面白くなりそうじゃ」

鉄心は自慢の髭を撫でて笑っている。

「セリカよ、我も参加できるように手配をしておけ。大戦までの間、

我は戦いの感覚を取り戻しておく。悪いが鉄心よ、軽く手合わせを願いたい」

「いいじゃろう、ここでは被害が出るからの誰もいない無人の場所でやるかの」

そう言いハイシェアと鉄心は蔵から出て行ってしまった。
セリカはため息をついて蔵から出た。

[illegible]

「ワシと軽い手合わせをしたがかなり出来る相手じゃったわい」

「そうですか、それは楽しみ半分、不安半分デスネ」

それ以降ルーと鉄心は一言も喋らずに百代の戦いを静観していた。

「やはり戦いは面白いの！」

ハイシエラが百代の攻撃を受け流しながら笑う。
久しぶりの一騎打ちなのかハイシエラは興奮していた。

「それは私も同じだ！　これだから戦いは止められない！！」

百代も同格の実力を持つハイシエラに対して歓喜と興奮を感じた。
ハイシエラの剣が百代に迫るが、百代は腕に気を集中して防いだ。
刃が潰れている剣だが一般人には持てないほどの重量でありハイシエラが自分でカスタムした剣だ。
いくら百代でも喰らえばただじゃ済まされない。

「人間のくせに規格外の強さじゃ」

ハイシエラが剣を軽々と肩に乗せ百代に言う。

「私も久しぶりの骨のある戦いだ」

百代はそう言い指をパキポキと鳴らしながら答える。

「では小手調べは止めにするかの・・・」

そう言い放つとハイシエラから抑えられた力が解き放たれた。
周りにいたと思われる鳥などの生き物が一斉に逃げ出した。
百代にはそれ以上の威圧感と殺気が襲う。

「・・・怖いかな？」

ハイシエラが百代に対して言う。

しかし百代の顔は笑っていた。

「くっくっく、まさか。これ以上ないほどの舞台だ!!」

百代は拳を構える。

その姿にハイシエラも笑う。

「よくぞ言った！ 御主は恐れておらぬ。この我を！ それこそ我が盟友になる者ぞ！」

ハイシエラは剣を振り上げ百代に突進する。

百代も同じくぶつかりあった。

剣と拳が交差する毎に衝撃波が起こり突風が巻き起こる。

（力負けしておるな・・・ならばっ！）

ハイシエラが一旦距離をとった。

「我と契約を交えし地の眷属よ 今ここに命じる 我に力をつ!!」

ハイシエラの言葉で淡い光がハイシエラを包む。

百代は追撃に拳をハイシエラに放つが、あっさりと弾かれ逆に百代が吹っ飛ばされた。

「いきなり力が上がった!? 面白い!!」

百代はうまく着地し、攻撃に転じる。

「川神流・無双正拳突き!!」

「飛燕剣・身妖舞!!」

お互いの圧倒的な力がぶつかり合い後退した。

「強化しても同じか。楽しいの」

「揚羽さん以上の力だ。まだまだこれからだな」

お互いに状況を判断する。

そして目が交えると即座に衝突する。

まさに戦場、命がけの戦いがここで繰り広げられていた。

「甘い!!」

ハイシエラが百代の間隙を見て空中に飛ばす。

追撃しに追おうとするが、

「川神流・流星群!!」

百代の多数の拳圧が降り注ぎ追撃を阻止しようとする。

だがハイシエラの動きは止まらない。

自分に当たる拳圧だけ弾き、最小限の動きで回避していく。

そして、百代の足を掴み地面めがけて思いつ切り投げた。

「ぐはっ!!」

受身も取れないまま百代は地面にめり込んだ。

しかしまだ攻撃は終わってなかった。

空中でハイシエラは百代に向かって手を向けていた。

「永劫なる時の牢獄、暗黒と破滅、混沌より死滅を繰り返し、微塵に砕く無に帰せ」

ハイシエラの全身に力が漲っていく。

「――数多の素より、那由他に砕かん！」

一瞬の闇、そして光が弾けた。

そして光が静まり、百代のいた場所にはクレータが出来ていた。

「ふむ、ちとやりすぎたか？」

ハイシエラは百代の姿を探すが見当たらない。

ハイシエラが地面に着いた時、背後に気配を感じ振り返った。

「禁じ手・富士砕き！！」

ガードも出来ずにハイシエラはもろに攻撃を受け飛ばされる。

体勢を整え気配があった場所には百代が立っていた。

服も破けており出血もしている。

「お前の攻撃のせいかな、瞬間回復がうまく機能しない」

百代がハイシエラに言う。

ハイシエラも先ほどの攻撃でかなりのダメージを受けてしまった。

「では、これが最後の勝負かの？」

ハイシエラの言葉に百代は頷く。

両者ともボロボロだが目は死んではいなかった。

「いくぞ!!」

2人は駆けた。

お互いの全力を込めた攻撃を与えるために・・・

「天を計り天を開き 数多の星々 その輝きをもって 我に力を示せ」

ハイシエラは全ての魔力を手の平に集める。

百代も右腕に全ての力を集める。

「川神流奥義・無双正拳突き!!」

「純粹魔術・エルⅡアウエラ!!」

お互いの拳と手のひらが重なり、戦いで一番大きい爆発が起きた。遠くで見ていた鉄心たちですらびっくりするほどの爆発だ。

煙が晴れると2人は仰向けになり転がっていた。

「なかなか楽しめたぞ」

「私もだ、また一戦しようじゃないか」

2人は笑い、そして同時に気を失った。

第13話 川神大戦 (3) (後書き)

お次はセリカVSまゆっちになります。

こっちも出来るだけ早く投稿できるように善処しようかと思っています。
あとお知らせです。

新たに別の小説を書こうと思います。

ヒントは『護る』を使った2作品のクロスオーバーです。

分かる人もいるかも知れませんが(笑)

では次回作と新作をお待ちあれ!!

第14話 川神大戦 (4) (前書き)

大変遅くなりました。

久々の更新です。

待っていた読者の皆さん申し訳ありませんでした。

駄文ですがどうぞお読みください。

あと新しく別の小説も書いているのでそちらもよかったですらどうぞど

第14話 川神大戦 (4)

ハイシェラと百代が派手に戦っていると同時にセリカと由紀江は静かに対峙していた。

しかし2人には隙がなく膠着した状態が続いている。

「向こうは始まっているみたいだ。こちらそろそろ始めよう」

セリカは剣を構える。

由紀江も頷き刀を構える。

2人が使っているのは模擬戦の武器だが頑丈に出来ており、当たり所によっては大怪我の可能性もある。

「いきますっ！」

先に攻撃に出たのは由紀江の方だった。

フェイントのない突進、弾丸の速さの如くセリカに向かっていく。対するセリカは地面に剣を刺し、突進してくる由紀江にむかって決り飛ばす。

通常の間人が当たればそれだけで戦いは終わっただろうが、この戦いにはある意味達人同士の戦いだ。

自分に飛んできた石礫を剣で弾き、変わらぬスピードでセリカに接近する。

セリカは後退して距離を取ろうとするが由紀江がそれを許さない。あっという間に由紀江は間合いにセリカを捕らえる。

「そこっ！！」

由紀江の声と共にセリカのわき腹目がけて神速の剣が振るわれる。

セリカはその斬撃を剣で受け止め力任せに押し返す。

さすがの由紀江も自分より力のあるセリカに力負けし押し返される。それと同時にセリカの迎撃が始まった。

セリカが剣を振るうごとに風を斬る音が鳴る。

由紀江は全て紙一重で避けるが反撃できずにいる。

（まさかこれ程の剣だったなんて……！！）

由紀江はセリカの剣筋を見てそう思った。

自分とはまた違う洗練された剣は武士をしての自分を刺激する。

「戦いの中で考え事か？」

セリカの声で由紀江は我に返る。

目の前にセリカが剣を振り下ろそうとしている。

これは避けきれないと由紀江は思い剣で止めようとするが、振り下ろされた瞬間、背筋に寒気がした。

由紀江はとっさにセリカの剣を受け止めずに受け流した。

受け流された剣は地面に勢いよく突き刺さる。

それを機に由紀江は一時距離を取った。

「……さすが武士といったところか。今の攻撃を受けていればお前の剣は折れていただろうな」

セリカが地面に刺さった剣を引き抜いて由紀江に言う。

「そうですね……あんなに重い一撃では刀身が持たなかったでしょう。その体つきでよくその様な力が出せますね」

由紀江は地面に空いた穴を見る。

「……そうか？」

セリカは視線を追うように自分がやった穴を見る。

「それでは今度こそセリカさんに一太刀浴びせます！」

由紀江は全身から闘気を出す。

闘気を感じたセリカは攻撃に備える。

「そうげつ 黛流剣術・蒼月！！」

由氣江がセリカに刀を振るう。

横に一閃————それもさらに速い剣速。

セリカは太刀筋を見極め防御しようとした……がセリカは一瞬違う方向を見た。

そこにはもう1つの斬撃が自分に迫っている光景だった。

「くっ！！」

セリカは剣を受けずに避けるが肩とわき腹に剣が掠る。

転がりながら受身をして立ち上がる。

掠っただけだとはいえ痛みがセリカに襲う。

「さすがですねセリカさん。初見で完全ではないとはいえ避けられるとは思いませんでした」

由紀江は多少驚いていたようだ。

「……少し危なかったがな」

セリカは無表情で由紀江に言う。
そして再び剣を構え、由紀江を睨む。

「今度はこちらの番だ」

セリカが由紀江に向かって走る。
由紀江は気でセリカに気斬を飛ばし迎撃するがセリカは最小限の動きだけでそれを回避する。

「飛燕剣・枢孔紅燐剣すうくこうりんけん!!」

無数の斬撃が由紀江に襲いかかる。
それでも由紀江は冷静に対処する。

「はあああああ!!!」

自分に来る斬撃をうまく相殺する。
最小限に避け、リスクが少ないようにする、由紀江はそう考え攻撃に耐える。
だが相殺できずに漏れた斬撃が由紀江の身体に掠っていく。
それでも諦めずに一本一本攻撃に対処していった。

セリカの飛燕剣の嵐を何とかやり過した由紀江はセリカから目を放さない。
体の所々にかすり傷が見られるが闘志は衰えてはいなかった。

「…………俺の飛燕剣を耐えるやつは久しぶりだな…………いや、百代がいたか」

セリカは剣を下ろして由紀江に話しかける。

「1つ聞きたい。お前はこれ程の実力を持っているがその力で何を求める？」

「何を求める……………ですか？」

由紀江は言われたに戸惑った。
なぜそんなことを聞くのだろうか？ 由紀江は思ったが聞かれた以上答えてみようと決意する。

「私は武士の末裔です。自分の腕を鍛え、流を残していきたいです。でも私はこの力で物事を望みはしません。私の望みは……………友達が欲しいそれだけです」

由紀江が真剣な表情でセリカを見る。

セリカは目を閉じて「そうか……………」と呟く。

「私も質問ですがそう言うセリカさんは何を求めているんですか？」

同じ質問を由紀江はセリカにぶつける。

「俺はある人を探している。……………それだけだ」

セリカはそれだけ言う。

由紀江も「そうですか」と言うだけだった。

話が終わると遠くで光と爆音が鳴った。

「向こうも決着が着いてきたらしい。俺達も終わらせよう」

「そうですね、では……参ります」

由紀江は居合いの構えをとる。

セリカは無言で構えていた。

そして両者が同時に動いた。

「黛流居合い術・瞬間^{しゅんせん}!!」

「飛燕剣・枢孔^{さやしんこう}身妖舞^{みようぶ}!!」

2人が交差して共に背を向ける。

少しの静寂だがすぐに動き出した。

「私の負け……ですね」

由紀江が声を出した瞬間、バキッと手に持っていた刀が折れる。

刀が無い以上セリカに太刀打ちできないと判断したのだろう。

「いや、引き分けだな」

セリカが引き分けだと宣言した。

セリカが持っていた剣も刀身にヒビが走っていた。

振るう前に粉々に砕けるほどのダメージを与えていたようだった。

「引き分けですか……」

「ああ、武器を折られた剣士は負けたも同然だ」

セリカは由紀江に言う。

「俺達の勝負はこれで終了だ。あとは大和たち次第だろう」

セリカが大和たちがいるであろう方に視線を向けた。
すると上空に大きな花火が上がった。

「……なんだ？」

セリカはうまく状況の意味が理解できなかった？
対する由紀江は驚いていた。

「花火が上がったということは………」

由紀江がその先を言おうとしたが、山全体に声が響き渡った。

「川神大戦！！！！！！ 終了じゃあああ！！！！！！！！！！」

審判の鉄心が大戦の終了を宣言した。

第14話 川神大戦 (4) (後書き)

セリカの口調や性格がおかしくなっているような気がしてなりませ
ん。

そろそろ寿命が無くなってきたかな？

次回は川神大戦が終わります。

それから日常なりをお送りしたいと思います。

そろそろ新しいキャラでもだそうかなあ。

カーリアンが妥当でしょうか？

感想お待ちしております！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3567n/>

真剣で女神に恋しなさい！

2010年12月24日11時11分発行